はそれ以上となり得るものであつて、たゞ例外的にのみその價値と一致するにすぎないのである。であるから土地の生産物がその生産價格以上に販賣されるにしても、それは決して土地生産物がその價値以上に販賣されるとは云はれ得ない。價値以上に販賣さるゝが故にのみ生産價格を齎らすところの産業上の生産物が少なからず存する如く、又農業上の生産物がその生産價格以上に販賣されて、しかもその價値以下に販賣されるといふ場合も可能なのである。然らばそは何故であるか？

一商品の生産價格と價値との比例はその生産に要する資本の可變分と不變分との比例により、言葉を換へて云へば、その生産に要する資本の有機的組成によつて決定される。一生産部門に於ける資本の組成が社會的平均資本の組成よりも低位であるとすれば、卽ちその資本の不變部分(物的勞働條件に支出せる部分)と比較して、その可變部分(勞働に支出せる部分)が、社會的平均資本に於けるよりも大であるとすれば、斯の如き資本の生産物の價値は生産價格以上とならねばならぬ。換言すれば、かゝる資本は自己と等量なる社會的平均資本の可除分に比して、より多くの生きた勞働を使用するがゆゑに、より多くの餘剩價値隨つて又、より多くの利潤を産出するのである。かくしてその生産物の價値は生産價格を超過することゝなる。蓋しこの生産價格は資本回收分と平均利潤との和に等しく、そして平均利潤は右の商品を通じて産出さるゝ利潤よりも小であるからである。こゝに一生産部門に於ける資本の有機的組成が社會的平均資本のそれよりも低位にあるといふことは、この特殊の生産部門に於ける社會的勞働生産力が平均的水準以下に在るといふことを別の言葉にて云ひ現はしたものに外ならないことは云ふ迄もないであらう。以上述べたることは恰も農業生産部門とその他の生産部門との關係を云ひ現はせるものであつて、農業生産物は、かくの如き理由により、その價値は生産價格よりも大なのである。

斯樣に農業生産部門に於ける資本の有機的組成は社會的平均資本の有機的組成よりも低く、隨つて農業生産物の價値はその生産價格から超過することにより、この超過分[1]が卽ちこゝに謂ゆる絶對地代を成すのであつて、それは

1) 絶對地代がこの價値と生産價格との差の全部に等しいか、それともその一部分(大なり小なりの)に等しいかは、全く需要供給の關係如何と、新たに開墾さるべき地積の大小とに懸る。(Marx, Das Kapital, III, 2, S. 295. 同譯本三の四186頁)

各種の土地の豐度若くは同一種類の土地に與へらるゝ逐次的諸投資間の豐度の差から全然獨立せる地代、卽ち差額地代とは概念上分別せらるべき地代である。しかるに農業生產部門に於て、他の部門に於けると同樣に、資本の自由競爭が前提せらるゝ限り、農業生產物の價値は、他の場合に於けると同じく、現實に於て、その生產價格によつて販賣せらるゝことゝならねばならぬ。ゆゑに農產物の價値が、持續的にその生產價格を超過して、その價値にて販賣さるゝがためには、この生產部門に於て、資本の自由移動を妨ぐる何らかの障碍があらねばならぬ。それは何であるか？　資本の力を以てしては全く克服し得ざるか、或はたゞ一部的にのみ克服し得るにとゞまる外部的の一權力——土地所有は卽ちこれである。

かく農業生產部門に於ける資本の有機的組成が社會的平均資本のそれよりも低度にあるがため、農業生產物の價値はその生產價格を超過するといふこと、および資本の自由移動を阻むところの土地所有の存在、の二つの事實からして絕對地代は說明せられるのであるから、これらの點に於て明らかなる

理解を有たなかつたリカアドが絕對地代の存在を認識、說明し得なかつたのは當然である。リカアドがその『原理』第二章『地代について』の最初の部分に於て、地代と資本の利子、利潤とを混同するの不可なるを云ひ、アダム・スミス亦この混同を冒すものなりとして彼を難じてゐるその文句は、リカアドが絕對地代の存在を少しも認識しなかつたことをよく示してゐる。その詞に云ふ。

『アダム・スミスは、時として、地代を、私がそれに限定しようとするその嚴密なる意味に於て述べてゐるが、しかしより屢々、この言葉が通例用ひられる通俗的の意味に於て、述べてゐる。彼は、歐洲の南方諸國に於ける木材に對する需要、隨つて惹起されたるその價格の騰貴が、以前には何等の地代を生むことができなかつた諸威の森林に對して地代を支拂はしむるに至つた、と語つてゐる。しかし乍らかくアダム・スミスが呼んで地代となすところのものを支拂うた人は、その時地上に立つてゐたところの價値ある貨物に對する償として、それを支拂つたのであり、さうして彼は木材を賣却することにより得たる利潤を以て其額を取り戻したのであることは明白ではないか？　實際若し木

材が伐り去られたる後に、未來の需要を見越して、木材或はある他の生産物を栽培するがために土地を使用することに對して、或る何らかの報償が地主に支拂はるゝならば、かゝる報償は當に地代と稱することができる。それは土地の生産力に對して支拂はれるのであるから。しかしアダム・スミスによつて述べられたる場合には、その報償は木材を伐り去り且つこれを賣却するの自由に對して支拂はれたのであつて、それを栽培するの自由に對して支拂はれたのではない。彼はまた石炭鑛山の地代および採石場の地代についても論じてゐるが、これに對しても同じ議論が當て嵌まる、――即ち鑛山又は採石場に對して與へらるゝ報償は、これらの場所から採り去ることのできる石炭又は石材の價値に對して支拂はるゝのであつて、土地の原始的且つ不可壞的な力とは何等の關係をも有たないのである。これは地代および利潤に關する研究に於て、はなはだ重要なる一つの區別である。なぜといふに、地代を規制するところの法則は、利潤の進歩を規制するところの法則とははなはだ異なつてをり、そして同じ方向に作用することは殆んど稀であるから。[1]』

1) Ricardo, ibid., p. 45.（同譯本87―9頁）（傍點――森）

これに依れば、リカアドに在りては、自然林の所有者が木材を伐り去り又石炭鑛や採石場の所有者が石炭や石材を採るところの權利に對して支拂はれる『報酬』は地代ではなく、利子、利潤なのである。なぜなれば地代は、彼に在りては、土地の原始的不可壞的なる力の使用に對して支拂はれるものであるから、である。しかし如何に彼がこの『報償』を土地の改良に使用せられたる資本に對する利子、利潤であるとして說明しようとするも、それは彼れの價値說と撞著することなくして、爲し得ることではない。この場合果して自然林の所有者は木材を伐り出すがための『資本[1]』を有つてゐるか？　石炭鑛、採石場の所有者は石炭、石を採り出すがための資本を有つてゐるか？　この『報償』は一體何處から出て來るのか？　彼等は何等の資本をも有たず、又この『報償』は利潤でも利子でもないので、それはリカアドの云ふ差額地代でないところの地代――即ち絕對地代なのである。この場合リカアドはこの『報償』の性質を說明するには甚だしい混亂に陷つてゐる。彼によれば、この『報償』は『そのとき地上に立つてゐたところの價値ある貨物に對する報償』であり、そしてそれは『木材を

1) 資本家に經營される場合に於ても同じ、かゝる場合に於ては資本は殆んど全部可變資本に投ぜらるゝのみ。

賣却することにより、得たる利潤を以て『取り戻されるのである。又『鑛山又は採石場に對して與へらるゝ報償』は、『これらの場所から採り去ることの出來る石炭又は石材の價値』に對して支拂はれるのである。こゝに『價値』は使用價値を意味するものと解すべきであるが、しかし使用價値あるもの必らずしも商品であるとは限らない。この場合木材および石炭、石材が商品たり得るがためには、木材が伐られ、石炭石材が採出せられ、ともに運搬せられるがために、何らかの勞働が費されてゐなければならぬ。『報償』の本源はこの勞働に見出さるべきであつて、勞働價値を離れてそれを販賣により得る利潤に見出し、それらの貨物の使用價値に對して支拂はれる報償である、などゝ云ふは、彼れの根本的立場と甚だ矛盾するものと云はねばならぬ。リカアドが價値と生産價格とを分別せず、地代は土地に投下される資本の利子たるものであるとする限り、それに何等資本の放下せられないところの自然の落流、自然林、鑛山などに地代の發生する由がないのであるから、一度び絶對地代の存在に面して彼は、止むを得ずかゝる曖昧にして彼れの根本的立場を覆へすが如き説明を爲したのであらう。

しかるに右の例證は明らかに絶對地代の存在の一例證たり得る、といふのは材木伐採、採鑛、採石などには、殆んど全く勞働に支出すべき可變資本のみが使用されてゐるのであるから（この場合自ら資本家として他をしてかゝる仕事を行はしめると假定する）、即ちかゝる生産部門の資本の有機的組成の程度は社會的平均的資本の有機的組成の程度より低いのであるから、かゝる部門に於ける餘剰價値の割合は大であり、隨つてかゝる貨物の價値はその生産價格を超過し得るものである。平均利潤以外のこの超過額が地代の形にてその所有者の手に歸するのであつて、それは差額地代と本質上異なるところの絶對地代に外ならぬ。たゞかく絶對地代が發生する場合、價値と生産價格との離反を持續的に支持するところの障碍――自然物又は土地の所有――の程度の異なるに應じて、或はその差額が大であり或は小であることは云ふ迄もない。[1]

以上述べたるところにより明らかなるが如く、絶對地代はその勞働價値を

1) 絶對地代理論の詳しきことについては Marx, Das Kapital, III, 1 の地代論のところ及び Theorien, II, 1, 2 のロードベルタス、リカアドの地代論批評を見よ。

正當に支持、發展することにより甫めて推論され得るところのものであつて、リカアドは然かせざりしがゆゑに、遂に絶對地代の概念を缺いたのである。勞働價値論と地代論との關係は、彼に在りては、たゞ半面的に取扱はれてゐるにすぎないのである。ディールを初めその他多くの學者は、リカアドの次の詞――『一國の穀物および粗生生産物が、實際、一時の間、獨占價格にて賣られることはあり得るであらう。だがかゝることが永久的にあり得るのは、最早や資本が有利に土地に投ぜられることができず、隨つてその生産物が增加され得ない場合に限らる。かゝる場合に於て、耕作されてゐる土地の總ゆる部分隨つて又土地に使用される資本の總ゆる部分は、地代を生ずるに至るものであつて、それは實際收穫の差異に比例して種々異なるものである。』[1]『しかし私が十分瞭にしようとしたことは、一國が總ゆる部分まで、最極限まで、耕作され盡くすに至る迄は、資本の一部は常に何等地代を生じない土地の上に使用されてゐるものである、といふことである。』[2]――に顧みて、リカアドは絶對地代の存在の可能を暗示したか否かについて論議する。しかしこの場合リカアド

1) Ricardo, ibid., p. 235,
2) Ricardo, ibid., p. 236.

が其存在を暗示したと思はるゝは、寧ろ獨占地代であつて、絶對地代ではあり得ない。彼等多くの批評家は絶對地代と獨占地代とを混同するの誤りに陷つてゐる。リカアドに於ては絶對地代の觀念は跡方も存在しないのである。

第二章　リカアドの價値論と勞賃論

前章に於て、私は、リカアドの差額地代は、貨物の平均的市場價値、價格の決定により成立するものであるから、それが理論は、必然的に、彼れの價値論と密接離るべからざる關係に在ることを瞭にせんとした。リカアドに從へば、かく一定種類の貨物の價値が平均的市場價値(彼に在りては寧ろ最大限界の勞働分量若くは生産費)によりて決定せらるゝことにより、地代が發生し、それが地主に支拂はれたる後に殘りたるところの價値總額は、勞賃、利潤を成すのであつて、それから先づ勞働者に勞賃が支拂はれ、その殘額が利潤として全部企業資本家の所得となるのである。この勞賃は如何にして決定せらるゝか？それが決定は彼れの價値論に對して如何なる關係に在るか？　これ私が本章に於て吟味せんとするところの問題である。

先づ(一)に勞賃決定と價値論との關係に就てリカアドの說く所を窺うて見たいと思ふのであるが、この點に就ての彼れの態度は、表面上、大體に於て、正當であり、且つそれが理論は割合に簡單であつて、既に一般に紹介せられてゐるのであるから(私も嘗てその紹介批評を試みた[1])こゝには極くその大綱を述べるにとゞめて置く。

次に(二)に於て、私は、勞賃決定についてとるところの彼れの根本的態度の缺陷を指摘することにより、この缺陷あるがため、彼れの勞賃決定の理解が不十分に了つたのみならず、彼れの全經濟理論に極めて重要なる影響を及ぼすに至つたことを瞭にして見たいと思ふ。この彼れの基本的缺陷は從來の學者の多くが見逃してゐる所のものである。この章に於て特に目指すところは寧ろこゝにある。

一

リカアドの云ふ所に依るに、勞働(その實勞働力)は、賣買せられ、そしてその分量が增減され得る所の他の總ての貨物と同樣に、自然價格と市場價格とを有つてゐる。さてこの勞働の自然價格とは、彼に依れば、『勞働者をして相互に增加又は減少することなしに生存をなし、且つその種族を永續するを得しむる

1) 拙稿『客觀的勞賃論の史的發展』經濟論叢第十八卷第四號所載。

に必要なる價格の謂であつて、[1]』結局勞働者の生活資料の價格に歸する。彼は云ふ。

『勞働者が彼れ自身および家族――勞働者の數を維持するに必要である所の――を支ふるの力は、彼が勞賃として受取るところの貨幣の分量如何に依るものではなくして、その貨幣で購買することが出來るであらう所の、そして慣習上彼に必要不可缺のものとなれる所の、食物、必要品及び便利品の分量如何に依るものである。だから勞働の自然價格は、勞働者および彼れの家族を支ふるために要求さるゝ食物、必要品および便利品の價格如何に依る。食物および必要品の價格の騰貴に伴うて、勞働の自然價格は騰貴するであらう。その價格の下落に伴うて、勞働の自然價格は下落するであらう。[2]』

さうしてリカアドに在りては、この勞働の自然價格は、社會の進歩に伴うて、益々騰貴する傾向を有つてゐる。何故なれば勞働の自然價格を決定するところの生活資料の價格は、その生産の困難が益々加はる結果、益々騰貴するに至るであらうからである。

1) Ricardo, ibid., p. 70. (同譯本137頁)
2) Ricardo, ibid., p. 70. (同譯本137—8頁)

この勞働の自然價格は、右の文章に於ても亦示さるゝが如く、決して生理的に絶對的に必要なる生活品の價格を意味するものではなく、『慣習上彼に必要缺くべからざるものとなれる所の食物、必要品、および便利品』の價格を意味するものであり、又『勞働の自然價格は、それが食物、必要品に評價せらるゝ場合にても、絶對的に確定不動なるものと思つてはならない。それは同じ國の中に於ても、時により異なり、そして異なれる國に於ては著しく相違がある。勞働の自然價格は主として國民の風俗習慣に依存してゐるのである。[1]』

次に彼れの謂ふ所の勞働の市場價格とは、『供給の需要に對する比例の自然的作用に依つて、それに對して事實上支拂はるゝ所の價格である。勞働は勞働の稀少なる時に高く、豐富なる時に安い。さうして如何に甚だしく勞働の市場價格がその自然價格から離れようとも、そは他の貨物の如く、之に一致せんとするの傾向を持つてゐる。[2]』

かくリカアドに在りては、勞働の價格に、一般商品の價格に於けると同じやうに、自然價格と市場價格とがあるのであるが、彼はこの二者を如何にして相

1) Ricardo, ibid., p. 74. (同譯本144頁) この點に就ての詳細は前出拙稿を見よ。
2) Ricardo, ibid., p. 71. (同譯本139頁)

關係せしめんとしたであらうか？　卽ちそれを如何なる機構により相一致せしめんとしたであらうか？　彼はこの自然價格と市場價格との一致の機構を、一般商品の價格の場合に於ては、平均利潤率の法則に見出したのであるが、この勞働の價格の場合に於ては、彼は、それを、人口は食物が許す限度迄增加せんとするの傾向がある、若くは人口は食物より一層大なる割合を以て增加せんとするの傾向がある、といふマルサスの人口法則に見出したのである。彼れの說く所を見んに、彼れの曰く、

『勞働の市場價格が其自然價格を超えたる場合には、勞働者の境遇は佳良にして幸福なるものとなり、彼は比較的多量の生活必需品および享樂を支配し、從つて健康なる多數の家族を養育することが出來得るやうになる。しかし乍ら高き勞賃が人口の增殖に及ぼす奬勵に依つて、勞働者の數が增加する時には、勞賃はその自然價格迄再び下落し、時として反動の結果この水準以下に下落することさへある。

『勞働の市場價格が其自然價格以下に低落する場合には、勞働者の境遇は窮乏の極に達する、卽ち慣習上絕對的に不可缺となつてゐる慰樂物でさへ彼等の手から奪ひ去られて終ふ。そしてかゝる窮乏の結果勞働者の人口が減少するに至るか、勞働に對する需要がより增加したる後に於て甫めて、勞働の市場價格はその自然價格迄昇り、かくて勞働者は勞賃の自然率が與ふる所の相當なる享樂物を享受するに至るであらう。[1]』

右はリカアドに於ける勞働の價格の決定およびそれが變動の理論の大要である。彼にありては、勞働の需要は資本(流動資本)を意味し、その供給は勞働人口を意味するのであるが、勞働の市場價格は、その自然價格に一致せんとする不斷の傾向を有するに拘はらず、この需要と供給との二つの大いさの割合如何により社會の進化の或る一定の段階に於ては、或はその自然價格以上に昇り、或はそれ以下に降ることがあり得る。卽ち向上發展しつゝある社會に在りては、勞働の市場價格は、或る不定の期間內、斷えずその自然率よりも上にあり得る。蓋しかゝる場合に於ては、勞働の需要(資本)の增加が、その供給(勞働人口)の增加よりも一層大なるからである。しかし乍ら勞働者に好都合なる

1) Ricardo, ibid., pp. 71—2. (同譯本139—40頁)

かゝる事情は長く永續するものではない。社會の自然的發達の或る時期に達すると勞働の供給はその需要を超過し勞働の市場價格は下降するに至る。何故なれば勞働者の供給は同じ程度で增進して行くが勞働者に對する需要即ち資本の增加は勞働生產力漸減の結果――資本蓄積增加――勞賃騰貴――人口增加――穀價騰貴――劣等地耕作――勞働生產力減退――漸次鈍るに至るであらうからである。[1]

この勞働の價格決定の理論――所謂生存費說――は遠くフィヂオクラアト、スミスなどから承け繼がれたるものであるが、リカアドは、この勞賃論によつて、勞働者階級の貧困窮乏の狀態は避くべからざる必然的の運命であることを論證せんとしたのである。然るにその後この勞賃論は、ラサールに依り勞賃鐵則〔das eherne (ökonomische) Gesetz〕の名の下に、勞働者の悲慘なる境遇を暗示するものとして、勞働者解放運動に利用せられたものであるが、更にマルクスに至つて、それは一段の洗鍊を加へられ、彼れ獨特の立場からして、所謂剩餘價値理論の出發點とせらるゝに至つたものである。

1) Ricardo, ibid., pp. 72, 73—4.

リカアドの勞賃論の結構は、右の如く、所謂生存費說――勞働生產費說であるが、彼れの勞賃理論のうちには恰も彼が勞賃の需要供給說の一つの形であるところのかの勞賃基金說 (wage-fund theory) をとりたるが如く人をして想像せしむる個所がないでもない。(註一) がしかし彼はそれによりたゞ勞働の市場價格の決定がかゝる一種の資本基金(需要)の如きものに制約せらるゝことあるべきを言つたに過ぎぬのであつて、彼れの勞賃論の骨子が依然として勞働生產費說に在ることは申す迄もないのである。たゞリカアドに在りては一般貨物の價値、價格の決定の場合に於けるよりは、勞賃の決定の場合に於ての方が、勞働の需要供給に因る變動により、多くの重要が加へられてゐるがやうに思はれる。例へば彼れの詞に左の如きものがある。

『勞働の價値も亦等しく可變的であつて、他の總ての物と同じく、社會狀態の總ての變化と共に一樣に變動する所の需要供給間の比例によつて、影響さるるのみならず、又勞働の賃金を費して得らるゝ所の食物およびその他の必要品の價格の變動によつても、影響されてゐるのではなからうか?』[1]

1) Ricardo, ibid., p. 10. (同譯本17頁)

『貨幣價値の變動……を別にするときは、勞賃は二つの原因から騰貴し又は下落するが如くである。その原因とは、

第一に、勞働者の供給および需要であつて、

第二に、それに勞働の賃金が支出さるゝ所の貨物の價格である。[1]』

（註一）リカアドがそれに依つて勞賃基金說をとつたかのやうに思はるゝ所の彼れの文章を、左に若干引用して見る。

『若しも租稅が直ちに資本家に賦課されたのであつたならば、勞働を維持するがための彼等の基金は、その目的のための政府の基金が增加するその同じ程度にて減少したであらう。隨つて勞賃は何等騰貴しなかつたであらう。といふのは同じ需要はあるであらうが、同じ競爭はないであらうから。……しかし乍ら勞賃に課せらるゝ租稅の額が、勞働者に對して增額せられたる後、その雇傭者に無代にて支拂はれると假定するならば、それは勞働維持のための彼等の貨幣的基金を增加するであらう、が貨物も勞働もどちらも增加するものではないであらう。……資本を減少することにより、彼等は勞働維持のための眞の基金を減少する傾向がある、隨つて又それに對する眞の需要を減少する傾向がある。[2]』

『社會の自然的進步に於て、そして生產の困難が增加するに於て、地代および必需品の騰貴が資本の利潤および勞働の賃金の上に齎らすところの總ゆる影響は、課

1) Ricardo, ibid., p. 75.（同譯本146頁）
2) Ricardo, ibid., pp. 204—5.

稅のために勞賃が騰貴することからも、同じく出て來るであらう。だから勞働者の享樂品は、彼れの雇傭者のそれと同じく、この租稅によつて減少せらるゝであらう。それは特にこの租稅のみによつてゞはなく、同じ額を騰貴せしむる所の總ゆる租稅によつて、減少せらるゝであらう。それらは總て勞働維持のための基金を減少する傾向があるであらうから。[1]』

『それ故に利潤率が高めらるゝのは、市場が擴張せられたる結果ではない、假令かかる擴張は、貨物の分量を增加する上に於て同樣に有效であり、又それによつて、吾吾をして、勞働を維持するがための基金を、並びにそれに勞働が使用さるゝ所の原料を、增加するを得しむるであらうとは云へ。[2]』

（註二）同樣の意義の文句は他にもある。

『私は思ふに、利潤は勞賃に依存する——勞賃は勞働の需要供給ならびにその勞賃が費されるところの必需品の生產費に依存する。[3]』

『總ゆる國の勞働者階級は勞働の供給を寧ろ需要以下に保つことが最も利益である。しかし勞働の支持に對する基金が、隨つて勞働に對する需要が、最も急速に增加するときは、彼等勞働者は最も幸福である……。[4]』

二

以上リカアドの勞賃論の大要を見たのであるが、それに依れば、勞賃は勞働

1) Ricardo, ibid., p. 208.
2) Ricardo, ibid., p. 112.（同譯本216頁）
3) Letters of Ricar do to Malthus, p. 120.
4) Letters of Ricardo to McCulloch, p. 54.

の價格なりとせられてゐるのであつて、一般商品の場合に於けると同樣彼れの勞賃理論は、大體に於て、彼れの價値論に立脚せるものであることを知る。さうしてこの彼れの態度は、一般的に、是認せらるべきものであるがやうに思はれる。しかし乍らこゝに彼が勞働の價値決定に就て說く所は、決して完全であるとは云へない。否それには極めて重要なる一つの基礎的理論が缺けてゐるがため、彼れの勞賃論および彼れの全經濟理論に救ふべからざる大なる影響を及ぼすに至つたことを注意しなければならない。私は、こゝに、このことに就て、若干考へて見たいと思ふ。

既に吟味し了へたるが如く(第一篇第三章)、リカアドはアダム・スミスが支配勞働(その實勞賃)を以て、貨物の價値の決定標準とすることを難じ、費されたる勞働と支配する勞働とは、二つの相異なれるものであることを言つてゐるのであるから、彼は當然にこの二つの概念を識別したものであるけれども、たゞそれ丈けであつて、何故に然るかを詮索するところがなかつた。このことは彼が所謂勞働の價値とは、其の實、商品價値の構成要素である勞働をそれ自ら

が變動するところの、勞働者の人格內に存在するところの、勞働力の價値であることを、彼が意識するところなかつたことを示してゐる。隨つて彼に於ては、かゝる意味にての勞働力の價値および價格の概念はなほ明確に把持せられてゐないわけである。

惟ふに勞働者が企業家に販賣し得るものは、彼れ自身の勞働力であつて、それを使用することにより發動するところの勞働そのものではない。勞働力は一つの商品——しかも特種なる商品——であつて、それ自身商品と同じやうに價値を有つてゐるが、勞働そのものは價値の實體であり內在的尺度にすぎずして、それ自身としては、何等の價値をも有つてゐない。

リカアドなどの正統學派のものは、勞働の需要供給一致したる場合、殘るところの勞働の自然價値を云爲し、結局それを勞働者の受くるところの生活資料の價格によりて決定せんとしたのであるが、彼等がこゝに勞働の價値、自然價格と謂ふ所のものは、彼等の無意識のうちに、本來の問題と入れ換つてしまつた。なぜなれば勞働の生產費そのものを以てしては、彼等は徒に一つ所を

ぐる〳〵廻つてゐるだけで際限がないからである。かくて彼等が勞働の價値と名づけてゐるものは、『事實上勞働者の人格内に存し、そしてその人格の機能なる勞働とは異なること恰も一つの機械がその作用と異なるが如くなるその勞働力の價値である。[1]』マルクスはこの彼等の態度を批評するに左の詞を以てしてゐる。

『經濟學は、勞働の市場價格と所謂價値との區別、並びに利潤や、勞働に依つて生產されたる商品價値やに對するこの價値の關係に携つてゐたが爲めに、分解の進むに伴れ、啻に勞働の市場價格からその假想の價値に到らしめたのみでなく、更にこの勞働の價値自體をば勞働力の價値に歸するに到らしめたことを決して發見しなかつた。正統派經濟學は自己の分解の斯くの如き結果に就て無意識であり、「勞働の價値」、「勞働の自然價格」などの範疇をば問題の價値關係の最後の適當なる表章として無批判に採用せる結果、後段見るが如き解し難き混亂と矛盾とに陷り、且つその外觀のみに臣事するを主義とする淺薄なる俗學的經濟學に、安全なる活動地盤を提供した。[2]』

1) Marx, Das Kapital, I, Volksaus, S. 474.（同譯本一の二460頁）
2) Marx, a. a. O., S. 474—5.（同譯本同册460—1頁）

リカアドがかく勞働力の概念を意識的に明白に把捉することができなかつたことは、同時に、彼が、勞働と資本、生きたる勞働と對象化されたる勞働、勞働對資本の交換と商品對商品の交換、との間に横はれる本質的の差異を理解することができなかつたことを意味してゐる。即ち彼は、これらの二者を本質上たゞ同じものであるとなし、勞働力は一種の商品であるが、しかし特種なる商品であることの理由を問はんとしなかつたのである。さうしてこのことは、延いて、彼れの價値論の結構が、内容的に殆んど、剩餘價値說が依つて以て立脚する理論的地盤を形造つてゐたに拘はらず、それを發展せしむるに至らなかつた所以である。

さきにも一言したるが如く、リカアドは、アダム・スミスが價値の決定標準として、貨物の生產に費されたる勞働の外に、その支配若くは購買するところの勞働を選んだことを非難し、この二者は、資本家的社會に於ては、決して同じではない、としたのであつて、この點に關するリカアドの非難は、十分であるとは云へないにしても、よくスミスの弱點を突いてゐることは爭はれない。しか

しリカアドは、勞働の價値(勞賃)が如何に變化するも、貨物に費されたる勞働の相對的分量によりて、その價値が決定せらるゝと云ふ價値法則は、それがために少しも排除せらるゝものではない、卽ちこの二者は同じものではない、といふことを云つたのみにて、然らば何故にこの勞働(力)が他の商品と分別せらるるかの理由を繹ねて見ようとしないのである。詳しく言へば、リカアドは、何故に一般商品間の交換に當て嵌まる法則が、勞働と資本間の交換に當て嵌まらないかの問題に答へるところがない。否一度だつてこの疑問を提出したことさへない。この二者、卽ち直接勞働、間接勞働若くは現在勞働、過去勞働はマルクスに在りては、特に生きたる勞働(lebendige Arbeit)、對象化されたる勞働(vergegenständlichte Arbeit)と呼ばれ、資本家的生產方法の本質の闡明に連關するところのそれ〳〵の意義を有つてゐるのである。

斯樣に生きたる勞働と對象化されたる勞働との間に橫はれる本質上の差異を辨へなかつたところのリカアドの態度は、彼れの著書の隨所に見出される。例へば彼は云ふ。

『直接貨物に加へられたる勞働が、その價値に影響するのみならず、かゝる勞働を補助する器具、道具、及び建物も亦、爾かする。[1]』

卽ち彼に依れば、一つの商品の價値は、それが生產に必要なる生きたる勞働卽ち直接若くは現在勞働と、對象化されたる勞働卽ち間接若くは過去勞働とに依り同樣に決定せらるゝものである。他の言葉を以てすれば、その勞働が生きたものであらうが、對象化されたるものであらうが、或は又現在的、直接的のものであらうが、過去的、間接的のものであらうが、その勞働の形式に係はりなく、それらは同樣に、價値構成に與かる勞働なのである。

なほリカアドに依れば、『資本は、一國の富の中、生產に使用せられ、そして食物、衣服、道具、粗生原料品、機械など勞働を行ふに必要なるものより成り立つところのその部分であり』、『然らばこゝに資本家があつて、彼等は彼等の貨物の生產に年々正に同一量の勞働を使用し乍ら、而も彼等の生產する財は、銘々各人によつて使用さるゝ固定資本、卽ち蓄積されたる勞働の分量が異なるために、價値を異にする場合がある。』又彼は『より少しの資本、或は同じことであるが、

1) Ricardo, ibid., p. 17. (同譯本31頁)

より少しの勞働は土地の上に使用せらるゝであらう。』とも云つてゐる。すべてこれらの詞は、彼が資本と勞働との各々の本質を理解するところがなかつたことを物語つてゐる。

かくの如くにして、リカアドに在りては、資本は獨立せる力として勞働者に對抗する所の物的條件として説明せられず、同時に又或社會的關係として説明せられなかつた。彼に在りては、直接勞働、間接勞働があるのみであつて、それは勞働行程に於ける單なる物、單なる要素たるにすぎずして、決してそこから勞働と資本との關係、勞働と利潤との關係が發展し出づるてふものではないのである。[1]

このリカアドの缺點は、延いてはリカアド學派の解消に導いたものであるとして、マルクスはこの點に關するウェークフィールドの左の詞を引用し、その尤もなることを言つてゐる。

『勞働を一つの商品と看做し、又勞働の生産物たる資本を他の一つの商品と看做す時、この二つの商品が同じ勞働の分量により決定せらるゝならば、一定

1) Marx, Theorien, II, 1, S. 119.

量の勞働は、如何なる狀態の下に於ても、同じ勞働の分量によりて生産せられたる資本の分量と交換されるであらう。即ち過去勞働は……常に、現在勞働の同じ分量と交換されるであらう。……併し他の商品と比較せるその勞働の價値は、尠くとも勞賃が割前に依存してゐる限り、同じ勞働分量に依りて決定せらるゝものではなく、需要と供給との關係に依りて決定せらるゝものである。[1]』

以上に於て見たる如く、リカアドは、資本に對抗したる意義に於ける勞働、即ち勞働力の概念を明確に、意識的に、捉へることができなかつた結果、それが價値、價格、即ち勞賃の決定の理論は、一見表面上、非難すべきところなきが如くなれども、一歩突き進んでそれを吟味するときは、そこにはかなりの矛盾、曖昧があるのを見出す。

リカアドの勞賃決定の理論のうちには、彼れの無意識のうちに、左の三つの勞賃決定理論が相紛淆し提言せられてゐる。

1) Wakefield, W. G., his edition of Smith's "Wealth of Nations," V. I, 1836, London, pp. 230—1, note, (京大藏本) cf. Marx, a. a. O., S. 117. od. Marx Das Kapital, 1. Volksaus. S. 472, Note.

(一) 勞働の價値は、勞働者の受くる所の貨幣若くは生活資料の額、價格によつて決定される。卽ち勞賃、勞働の價値は、彼れの提供する勞働とこの貨幣若くは生活資料との相對的關係これである。例へば一日の勞賃が金二圓、一日の實物勞賃が米五升なりと云ふが如し。

(二) 勞働の價値は寧ろその眞實價値は、勞働者の受くるところの生活資料若くは貨幣そのものゝ生產費、卽ちそれが生產に費されたる所の勞働および資本によつて決定される。

(三) 勞働の價値は、否寧ろ勞働力の價値は、その生產に必要なる勞働時間、卽ち結局勞働者の生活維持に必要なる生活資料の生產に必要なる勞働時間、換言すればその價値によつて決定される。

先づ(一)の勞賃決定理論から吟味せんに、かく勞賃が若干貨幣若くは若干生活資料であるといふ場合には、それは勞働者の提供する勞働と交換して得らるゝところの貨幣若くは生活資料によつて云ひ現はさるゝものであるから、つまりこの場合の勞働の價値は勞働の所謂相對價値である。斯樣に勞働の價値を他の交換物と相對的にのみ決定、概念することは、リカアド勞賃論に於て見らるゝところであるが、それは彼の一般貨物の價値に對する態度より見て正に當然であらう。しかしたゞそれのみにては到底勞働の價値が決定せられ得ないことは、彼れが、一般貨物の價値決定の場合は言ふ迄もなく、この勞賃決定の場合に於ても亦、實際にとるところの他の態度によつて推知することができる。かゝる場合に於ては、勞働が、相交換される他物、卽ち貨幣若くは生活資料によつて、相對的に關係づけらるゝことにより、その價値がそれらのものによつて表現せらるゝにすぎずして、價値そのものはかゝる相對的關係によつて決して決定せらるゝものではない。勞働の價値は何によつて決定せらるゝか、生活資料によつて、然らば生活資料の價値は何によつて決定せらるゝか、勞働によつてといふ循環論法に陷つてしまふ。勞働の相對價値は價値を前提としなければならない。

このことを更に詳論せんに[1]、眞實勞賃が勞働者の生活資料の價値に同じであるならば、生活資料の價値は、その眞實勞賃、卽ちそれが支配する勞働に同じ

1) cf. Marx, Theorien, II, 1, S. 120—1.

でなければならないことは云ふ迄もない。だから前者の價値が變化すれば後者の價値も亦變化する。假りに勞働者の生活資料が單に穀物から成り立ち、その生活資料が一ヶ月一クヲオタア小麥であるとする。然る時は、一月勞働の價値も亦上下する。しかし乍らかゝる勞働の價値を何等かの交換物に對する相對的關係であるとするならば、この小麥の價値、卽ちそれに含んでゐる勞働分量が增加しようと、減少しようと、一月勞働の價値には何等變りがなく依然として同じであらねばならぬ。換言すればこの小麥の勞働時間による價値、卽ちその眞實價値は變動するも、勞働の自然價格が支拂はるゝ限り、その小麥量の支配する勞働分量は依然として何等變はるところがない。この場合小麥と比較しての勞働の相對的價値には何等變はりがない。要するに同じ勞働分量が常に同じ使用價値を支配し、或は寧ろ同じ使用價値が同じ勞働分量を支配するのである。

この價値決定を相交換されるものゝ相對的關係にのみ求めんとする價値理論は、アダム・スミスの勞働價値論に於て、主要なる役割を演じて居り、さうしてこのことあるがために、彼れの勞働價値說は不純曖昧より脫することができなかつたのであるが、リカアドの勞賃論に於ても亦、一般價値論に於けると同樣に、この意義に於ける相對價値が、その眞實價値との關係が瞭にせらるゝことなくして、屢々それを壓倒して表面上に現はれてゐる。つまるところアダム・スミスに於ては甚だしく、リカアドに於ても亦屢々、この眞實價値(費消勞働價値)卽ち價値の內的不變的尺度と、その相對價値、交換價値、卽ち價値の普遍的尺度たる貨幣——それは價値決定を前提とする——とが混同されてゐるのである。

ところが次に詳しく述ぶる如く、ベイリーに依れば、このリカアドの相對的勞働價値理論は、價値の相對的性質なるよりして、當に自然であつて、(二)の勞賃は勞働者の受くる所の生活資料、貨幣そのものゝ價値、卽ちそれが生產に費されたる所の勞働および資本の分量に依存するとする態度を彼は極力非難するのである。

かくの『如くリカアドは勞賃を勞働と生活資料若くは貨幣との比であるとしたのであるが、更に彼は勞働の價値を勞働者の受くる所の貨幣若くは生活資料の價値、卽ちそれが生產に費されたる勞働および資本の分量に求めて、それを眞實勞賃であるとする。この勞賃理論は寧ろ彼れの勞賃論の骨子を成す。例へば彼は云ふ。

『勞賃は勞働者に支拂はるゝものゝ眞實の價値によつて、卽ちそれを生產するに使用さるゝ勞働および資本の分量によつて、測定さるべきものであつて、上衣、帽子、貨幣又は穀物の形に於けるそれらのものゝ名目價値によつて測定さるべきものではない。[1]』

『何度でも繰り返へす必要のあることであるが、利潤は名目勞賃によらずして、眞實勞賃に依る、卽ちそれは年々勞働者に支拂はるゝであらう所の磅の數量に依らずして、これらの磅を取得するに必要なる日々の勞働の數量に依つて定まる。[2]』

この勞賃を勞働と交換して得らるゝ所の生活資料若くは貨幣のその生產

1) Ricardo, ibid., p. 42. (同譯本82—3頁)
2) Ricardo, ibid., p. 124. (同譯本240—1頁)

に費されたる勞働によつて決定せんとするリカアドの態度は、勞賃の決定を貨幣→生活資料→それらの含む勞働分量に求めんとするものであつて丁度アダム・スミスが貨物の價値の決定を貨幣→貨物(相交換さるゝ)→支配勞働に求めんとする態度と軌を一にしてゐる。リカアドはスミスが支配勞働を以て貨物の價値の決定標準としたことを非難したのであるが、勞賃決定の理論に於ては、彼自らがその非難を冒してゐることゝなるわけである。

ベイリーは價値は一貨物と他貨物との相對的關係であり、リカアドの所謂價値も亦然りである、とする立場からして、このリカアドの勞賃決定の態度を難ずる。[1] ベイリーに依るに、勞働の價値は、勞働の或る一定部分に對して與へらるゝ或る何等かの貨物の分量によつてのみ言ひ現はされるにすぎない。だから若しその貨物が銀であるならば、一日勞働の價値は勞働者の受くるところの銀の分量、或は同じことであるが、志の數によつて云ひ現はされる。銀のこの分量が勞働の價値を云ひ現はしてゐることは、丁度銀の或る一定分量が一ヤードの布の價値を云ひ現はすと同じである。この一ヤードの布の價

1) Bailey, Dissertations, pp. 46—61.

値を云ひ現はす銀の分量を、吾々は布の價格と名づけるのであるが、これと丁度同じやうに、一日勞働の價値が云ひ現はされる銀の分量を、吾々は、勞賃と名づけるのである。この場合布の價格と勞賃とは丁度同じ言ひ方である。ところが價格は銀そのものであり、若くはそれから成り立つとなすことは、恰も一片の木材の長さがそれを測る道具から成り立つてゐるとなすと同樣、一つの誤でなければならぬ。若し吾々が布の價格の眞實價値若くは布の價格を生產するに必要なる勞働および資本を云々する場合には、異なれる詞を用ひてゐるので、若しこの言ひ方に何等かの意味が附けらるゝならば、それは布それ自身を生產するに要する勞働および資本なるべく、布の價値を言ひ現はすところのその銀の生產に費さるゝ勞働および資本ではないであらう、とベイリーは云ふ。さうして彼に依れば、この同じことが勞賃なる詞――若しそれがたゞ一つの意味しか有つてゐないならば、――に適用せられねばならぬ。即ち若し吾々が勞賃を生產するに要する勞働および資本を云々するならば、この場合それは勞働それ自身の生產に要する勞働および資本を云々し、勞働に對して與へらるゝ所の銀若くは何等かの他の貨物の生產に要するそれらを云々しないのと同じである。しかし乍らリカアドは、この詞により明に後者を意味してゐるので、それは、恐らくは彼がこの二つの觀念を無意識的に同一視することとよりして起る奇妙なる詞の轉用であるか、若くは若しさうでなかつたならば、同じ詞に二つの意義があるか、どちらかである。かくてベイリーは云ふ、『かくてリカアド氏は、極めて巧妙に、一見彼れの說――價値は生產に用ひられたる勞働の分量に依存するといふ――を覆す怖れある困難を避ける。若しこの原理を忠實に固執すれば、勞働の價値はそれを生產するに用ひらるゝ勞働の分量に依存するといふ途方もないことになる。だからリカアド氏は上手に轉廻することにより、勞働の價値を勞賃を生產するに要する勞働の分量に依存せしめるのである、若くは、彼れ自身の詞を用ゆるの利益を彼に與ふれば、彼は、勞働の價値は、勞賃――それによつて彼は勞働者に與へらる貨幣若くは貨物を生產するに要する勞働分量を意味する――を生產するに要する勞働の分量によつて評價せらるべきであると主張する。これは丁

度布の價値はそれが生産に投ぜられる勞働の分量によつてゞなしに、布と交換さるゝ所の銀の生産に投ぜられる勞働の分量によつて評價せらるべきである、といふに等しい[1]』と。

このベイリーの批評は、言葉の上だけでは、よくリカアドの弱點を突いてゐると云はねばならぬ。リカアドが勞働の價値の決定標準をそれと交換さる所の相手方の貨幣若くは生活資料の生産に費されたる勞働および資本に求めることは、何と云つても貨物の價値の決定標準をそれが生産に費された る勞働の分量に求むる彼れの價値論と相撞著せざるを得ない。ベイリーが眞實勞賃をかゝる意義に於ける勞働および資本に求むるのであるならば、寧ろ勞働そのものゝ生産に費されたるそれらに求むべきであると云ふは、論理的には正しい。しかしかくすれば勞働の價値は、結局その生産に投ぜられた る勞働の分量に依るといふ重語になつてしまつて、をさまりがつかない。この問題は如何にして解くべきであらうか。勞働者が企業家に賣るものは、勞働を生産行程に於て發動するところの勞働力であり、隨つてそれは勞働とは

1) Bailey, ibid., pp. 50—1.

別物であつて、その價値は、それと交換して得らるゝ所の生活資料でなしに、その生産に隨つてその再生産に、必要なる生活資料の價値によつて決定される、といふことによつて、甫めてこの難點が氷解する。リカアドもベイリーもこの勞働とは異なれる勞働力の概念に到達することができなかつたがために一方が勞賃決定を他の方面に求め、そして他方が之を嗤ふといふことになつたのである。しかし勞働力の價値卽ち生活資料の價値は、實際上、勞働者の受くる生活資料の價値に殆んど同じであるから、リカアドのかくの如き勞賃決定の理論も亦、表面上は、經驗上は、何等の破綻なくして濟むがやうに見える。だが論理上かゝることの到底許容し難きことは、彼がかく勞働力の價値を正當に決定し得なかつたがために、極めて重大なる影響を彼れの全經濟理論の上に齎したものであつた。卽ちさきにも述べたる如く、このことの爲めに、彼は商品と資本との差異、商品と商品との交換と、資本と商品との交換との間に横はれる差異を辨別せず、剩餘價値說を彼れの價値論から發展せしめ得なかつたものであり、結局彼が資本家的生産方法の本質を把捉し得なかつたもの

である。このリカアドの足らざる所――彼れの價値論に於て最も主要なる缺陷の一つ――に就て、マルクスは左の如く批評してゐる。

『アダム・スミスは、或る一定の勞働の分量は、或る一定の使用價値の分量と交換されるといふことからして、この勞働の分量は、價値の尺度であり、常に同じ價値を有してゐるが、その使用價値の分量は非常に異なれる交換價値を表現する、といふことを結論するの誤りに陷つてゐる。然るにリカアドは、第一に、このスミスの誤りを惹起すものは何であるかの問題を理解しなかつたがために、第二に、彼れ自身、商品價値の法則に何等關係するところなく、需要供給の法則にのがれることにより、勞働の價値を勞働力の生産に支出される勞働の分量によつてゞはなしに、勞働者が受取るところの勞働の生産に支出される勞働分量によつて決定したがために、二重の誤りに陷つてゐる。この後のことは、事實上、勞働の價値は、それに對して支拂はれる金の價値によつて決定されることになる。然らばこの金の價値は何によつて決定されるか？　支拂はれる金の分量は何によつて決定されるか？　それは或る一定の勞働分量が支配し、若くはそれによつて支配さるゝ所の使用價値の分量に依つて決定される。かくてリカアドは、言葉の上では、アダム・スミスを非難したその矛盾に陷つてゐるのである。[1]』（註）

斯様にリカアドは勞賃の決定を充分正確に取扱ふことができず、隨つて又剰餘價値說の發展にまでその價値說、勞賃論を導くに至らなかつたのであるが、しかし彼れの全價値論の構造は、又勞賃決定論の內容は、實質上、殆んど正當なる勞賃論、隨つて又剰餘價値論を誘導發展せしむるに十分なる程度に在つたので、それに達する迄には理論上はたゞホンの一膜を隔てるに過ぎなかつたのである。

（註）この點に對するマルクスの批評をもう一つ引用する。

『勞働者が受くる所の、卽ち彼れの勞賃にて買ふ所の、生活資料、卽ち穀物、衣服その他のものゝ價値は、それが生産に必要なる總勞働時間、卽ち直接勞働および對象化されたる勞働の分量によりて決定される。しかしリカアドはこのこと柄を縺れさしてしまつた。といふのは彼がそれに眞實の言葉を與へなかつたに因る。卽ち彼が、「その眞實價値たる勞働者の必要生活資料の價値を再生産するに必要なる

1) Marx, a. a. O., S. 123.

勞働時間のその部分は、彼れの勞働と交換して支拂はるゝその生活資料の等價である、」と云はなかつたことに因る。眞實勞賃は、勞働者が彼れ自身の勞賃を生産するがために、若くは再生産するがために、日々働かねばならぬ所の平均的時間によつて決定さるべきものである。[1]』

なほリカアドに在りては、勞働の價値(勞賃)は、與へられたる全勞働價値の利潤と分割されたる他の半分を成すのであるから、勞働の價値の大小、および變動は、このうち一方が增加すれば他方はそれ丈け減少するといふ意味に、考へられてゐる。彼は勞働の價値およびその變動の他の價値部分に對して相對的なることを前提としてゐるのである。詳しく言へば、彼に從へば、勞働の價値が騰貴若くは下落するといふは、絶對的に然ることを意味しない。それは利潤(および地代)に比較して然ると云ふに過ぎない。だから例へば勞働の價値がそれ自ら絶對的に以前より騰貴しても、卽ち彼れの受くる所の生活資料に費されたる勞働および資本が增加しても(生産資料卽ち使用價値增加し、價値減少する場合は云ふ迄もない)、利潤がより大なる割合を以て增加するならば、卽ち利潤を成すところの價値部分が總價値量のより大なる部分を占むるならば、この場合勞働の價値、隨つて眞實勞賃の騰貴はあり得ないことになる。このリカアドの態度は既に第二篇第一章に於て若干指示したる所に依り推測し得らるゝ所であり、且つ次節に於て利潤の性質に關する彼れの立場を吟味することによりより瞭となるであらう。今はたゞこの點に關する彼れの態度の最も明瞭に現はれてゐる左の文章を引用するにとゞめる。

『吾々が正しく利潤、地代、および勞賃の率に就て判斷するのは、各階級によつて取得さるゝ生産物の絶對的分量に據るのではなくして、その生産物を取得するに入用とせらるゝ勞働の分量に據るのである。機械や農業の進歩により全生産物は二倍になつても、勞賃、地代、および利潤も亦二倍さるゝならば、これら三者は相互に以前と同じ比例を保つであらう。そしてその何れも相對的に變動したとは言へないであらう。ところが若し勞賃がこの增加したる全部に與らずして、二倍される代りに、半分增加されるにすぎず、地代は二倍される代りに、四分の三增加さるゝに過ぎず、そして殘餘の增加は利潤に歸すと

1) Marx, a. a. O., S. 138.

するならば、地代および勞賃は下落し、そして利潤は騰貴したといふは正しいと私は思ふ。何故なれば若しこの生産物の價値を測定する所の一つの不變的標準があるならば、以前與へられしよりも、より少い價値が勞働者および地主の階級に落ち、そしてより多くのものが資本家階級に落ちたることが見出されるであらうからである。例へば、吾々は、假令貨物の絶對的分量が二倍しても、それは正確に以前の分量の勞働の生産物であることを發見するであらう。各々一〇〇個宛の生産されたる帽子、上衣、および一〇〇クヮオタアの穀物の中、

勞働者が以前には	二五
地主が	二五
そして資本家が	五〇
計	一〇〇

を取り、そしてこれらの貨物の分量が二倍となりたる後に、各々一〇〇の中、

勞働者がたゞ	二二
地主が	二二
そして資本家が	五六
計	一〇〇

を取るとするならば、この場合に[1]私は、勞賃および地代が下落しそして利潤が騰貴したと云ふのである。[2]』

この勞賃の相對的性質を瞭にしたることは、マルクスに依れば、リカアドの大なる功績の一つである。以前は勞賃は常にたゞ單純に考へられ、勞働者は隨つて生物として考察された。が今やリカアドによつてそれは社會的關係に於て考察されるやうになつた。階級の地位は相互に勞賃の絶對量によりはより多く比較的なる勞賃によつて條件附けられるものである。[3]

かくのごとく勞働の價値、勞賃は、利潤と對抗的なる關係にありつゝ、それと共に全價値を構成するものであるから、勞働の價値の變動は、他の一部分卽ち利潤の大小にのみ影響し、決して總價値の大小に影響を及ぼさざるべき筈である。然るにリカアドは、既に吟味したるが如く、(第二篇第一章)資本使用(單り固

1) この場合リカアドは前後總價値量は同じであるとしてゐる。前後總價値量が異なれる場合に於てもこの理法は同じである。
2) Ricardo, ibid., pp. 41—2. (同譯本80—2頁)
3) Marx, a. a. O., S. 141.

定資本使用の場合にのみ限らず)の種々なる場合に於て、勞賃の變動が價値の變動に及ぼすべきことを、彼れ特有の論理を以て――勞賃變動→利潤變動→相對價値變動――說いてゐる。このことは、彼が生產價格と價値とを混同し、利潤の本質を理解し得なかつたに出づることは、私の右の個所に於て詳かに述べて置いたところである。

第三章　リカアドの價値論と利潤論

リカアドに從へば、貨物の價値は最大限界勞働分量(若くは生產費)によりて決定せらるゝものであつて、地代を支拂ひたる後に殘りたる價値部分、又は何等地代を支拂はざる價値部分は勞賃および利潤として、各々勞働者および資本家又は企業家に歸屬すべきものである。さうしてそれから更に先づ勞賃が支拂はれて殘りたるものが、利潤として全部企業資本家の所得を成すのであるから、彼に在りては、企業資本家は殘餘要求者(residual claimant)たるのである。

かくの如くにして彼れの利潤論は彼れの價値論に依存して居り、それを基礎として理論づけてゐると見るべきが如くであるが、しかしもと〳〵彼に在りては、利潤存在は自明のことに屬し、それが本質を究明することはさして彼れの興味を惹かなかつたがため、利潤の本質、利潤率變動の原因などについての彼れの見解は、曖昧模糊、又は不十分なるものであつた。隨つて又彼れの價

値論と利潤論とは十分に關係づけられてゐると言はれないのである。さうして彼が利潤の本質および利潤率の變動を十分に彼れの勞働價値論の基礎に立脚せしめて理論づけ得なかつた結果は、それらの正しい説明を缺くこととなり、結局彼れの全經濟理論に救ふべからざる致命的の影響を及ぼし、それが自らなる發展を阻止するに至つたものである。

リカアドの利潤論に於て、彼れの價値論と關聯せしむることにより、問題として提起せらるべきものは、他の言葉にて言へば、つまり彼れの利潤論に於て基本的に問題となり得べきものは、次の三つの問題であると思ふ。利潤の本質、その發生源泉はその一であり、平均利潤率の法則はその二であり、利潤率低減の一般的傾向の理論はその三である。第二の問題については、既に大體に於て、第二篇第二章に於て吟味したるところであるから、こゝには他の二つの問題――この二つがこゝに目指す限りに於て特に重要である――のみを取扱ふであらう。なほ彼れの利潤論の枝葉を詳しく詮索することは、こゝに目的とするところでない。こゝには彼れの價値論と關聯する限りに於て、即ち彼れの利潤論の本質に關聯する限りに於て、これらの問題を吟味するにとゞめるであらう。先づ第一に彼れが利潤の本質の説明は、彼れの價値論と如何なる連關の下にあるかを見る。

一

利潤の本質は何であるか、その如何にして發生するか、に就てリカアドの説く所は極めて尠く、且つ曖昧、不明確である。キャナンの詞を借れば、『リカアドは具體的に利潤が何を意味するかをよく知つてゐたが、その性質および源泉の抽象的問題に就ては少しも興味を有たなかつた。彼はこの詞の定義を與へず、何處に於てもこの問題に就て正式に何等の意見をも述べてゐない。』[1] 詳しく言へば、彼れが所謂利潤は勞働者の生産するところの勞働價値の割取から成り立つものであるか、即ち彼れの利潤論は勞働搾取説乃至剰餘價値説であるか、或はそれとも利潤はかゝる餘剰勞働、價値より獨立して、資本若くは資本家それ自らの原因によつて成立するものであるか、即ち彼れの利潤論は資本生産力説又は制欲説の孰れかに屬すべきものであるか、について彼れの態

1) Cannan, The Theory of Production and Distribution, pp. 205–1.

度は極めて曖昧である。この點に就ては多くの解釋がその說を一にしてゐるといつてよい。ベエム・バワアクがリカアドを farblosen Schriftsteller のなかに數へてゐるのは[1]、一應尤もであるであらう。それ故にこの點に就ての諸々の解釋は、たゞその重要を何れに置くかによつて、比較的に相分れるにすぎないとも云ひ得るわけである。しかし私は、彼れの利潤の本質に對する態度が明確に現はれて居らぬ故を以てして、必らずしも彼れのこの點に對する眞意が推測、捕捉し得られないとは信じない。彼れの價値論勞賃論に對する態度よりして必然的に出で來る彼れの利潤論が、當然に、彼れの無意識の裡に、彼れの說く所に見出されることができると思ふのである。私は左にこの點に就ての解釋の主なるものゝ二三を擧げ、然る後、利潤の本質に就てリカアドの眞意が奈邊にあるか、若くはあるべきか、に就て、諸々の論據を示しつゝ、若干私見を開陳して見たいと思ふ。

ローゼンベルグは、リカアドが勞働者の報酬と彼れが生產したる所のものとは、勞働分量に測定せられて同じではない、とする態度[2]、および彼れの詞——

1) Böhm-Bawerk, Kapital und Kapitalzins. I, 4 Aufl., S. 76.
2) Ricardo, ibid., p. 9.（同譯本15頁）

『各異なれる事情の下に於ては、同一の資本の價値を一つの職業又は他の職業に提供する人は、得られたる生產物の半分、四分の一、或は八分の一を得、殘りは勞働を提供したる人々に勞賃として支拂はれるであらう[1]』『魚と鳥獸との相對價値は、全くその各々に實現せられたる勞働の分量に依つて決定せられるのであつて、生產量の大小如何、又は一般勞賃および利潤の高低如何に關しないのである[2]』に據り、彼が一種の剩餘價値說——特別なる名稱を用ひなかつたが——を說いたものであつて、マルクスの言へるが如く、彼れの利潤論は、事實上、剩餘價値說であると云ふ[3]。

ツッカアカンドルはこの點に就て左の如く云つてゐる。

『ベエムは、リカアドを、資本利子理論に關して、色彩なき論者のうちに數へる。が勞働分量は交換關係を決定するといふ說は、それ自らに於て、利潤は勞働收益よりの控除である、といふことを含めるものである、と私は思ふ。さうして彼がかゝる推斷を下せる所を見出すに難くはないのである。私は主張する、リカアドは「勞働者の報酬が彼れの生產せる所のものに比例せずして、自然的

1) Ricardo, ibid., p. 18.（同譯本33頁）
2) Ricardo, ibid., p. 20.（同譯本37頁）
3) Rosemberg, Ricardo und Marx als Werttheoretiker, S. 18—9.

勞賃論に依存してゐる」といふ說を代表するものである、と。彼は、更に、道具、勞働要具などに費されたる勞働は、たゞこれらが生產に役立つ限りに於いてのみ、生產物の交換價値に影響するものであつて、このことはそれらの道具が或る一階級に屬せる場合にも、何等變はるところがないことを、明瞭に述べてゐる。[1]』

ところがディールに依れば、リカアドの利潤論を餘剩價値說と解することは誤である。といふのは『リカアドは一般的に餘剩價値說をたてなかつたので、その萌芽だに彼には存在しなかつたからである。たゞに「個々の例外の場合」に對してのみならず、經濟生活の最も重要なる出來事に對しても、リカアドは勞働の外に資本要素に、獨立なる價値決定を許容したのである。彼は利潤をば勞賃の外に獨立せる一所得として解釋した。そして彼れの利潤論が如何に不十分であらうとも、彼は利子と企業家利潤とに獨立なる役目を與へたのである。[2]』

リカアドの利潤の本質に對する見解についての解釋がかくの如く種々と

1) Zuckerkandl, Zur Theorie des Preices, S. 256, Note
2) Diehl, Erläuterungen, I, S. 116.

相分たれてゐるのは、彼がこの點について明確なる意見を表現せず、人をして一見彼が相矛盾せる利潤論を支持したるが如く思はしむる言葉を不用意に述べてゐることに因るものである。例へば彼は、その價値論の修正を論ずる場合、左の如き詞を用ひてゐる。

『價値に於けるこの差は、兩方の場合に於て、利潤が資本として蓄積さるゝことからして起るのであつて、それはたゞ利潤が差止められたる時間に對する正當なる報償に過ぎないのである。[1]』

更に他の個所に於て次のやうな詞も見出される。

『私は既に言つた、この價格の狀態が永續的にならないずつと以前に、資本の蓄積に對する誘因がなくなるであらう、と云ふのは、誰れも彼れの蓄積をして生產的ならしむるの目的を有たないで蓄積するものはなく、そしてその蓄積が利潤に作用するのは、かくの如くに生產的に使用さるゝ時に於てのみであるからである、と。誘因がなければ蓄積はあり得ない。そしてその結果としてかゝる價格の狀態は決して起り得ない。農業者や製造業者は、恰も勞働者

1) Ricardo, ibid., p. 31. (同譯本59頁)

が勞賃なくして生活ができないのと同樣に、利潤なくば生活ができない。蓄積に對する彼等の誘因は、利潤の減少ある毎に減少するであらう。さうしてこの誘因は、彼等の利潤が、彼等の勞苦に對して、並びに彼等が自分の資本を生産的に使用するに際し必然的に遭遇しなければならない所の危險に對して、彼等に相當の報酬を與へない程に低い場合には、全く停止するであらう。[1]』

『然らば必需品の騰貴の結果として勞賃が騰貴し、隨つて資本の利潤として少量しか殘らないやうになり、爲めに蓄積に對する動機が停止するに至る迄は、生産的に使用せられない資本が、一國に於て、蓄積さるゝなどゝ云ふことは全く有り得ない。[2]』

これらのリカアドの文章はディール[3]、ベエム・バワアク[4]などの擧げて以て、リカアドが利潤の本源を勞働搾取說以外に求めんとした、との解釋に資せんとするものである。しかしこれらの文句は利潤の本質に對する彼れの態度を何等說明するに役立つものではないと思ふ。それらは利潤存在の止むべからざること、その正當性を意義してゐるやうであるが、決して利潤の本質の何

1) Ricardo, ibid., pp. 100—1. (同譯本195—6頁)
2) Ricardo, ibid., p. 274. (同譯本294頁)
3) Diehl, Erläuterungen, II, S. 153—4.
4) Böhm-Bawerk, a. a. O., S. 78.

たるやを示してゐない。隨つてそれらの詞は彼が剩餘價値說を支持したことゝ必らずしも相衝突するものではない。蓋し利潤の本源卽ち剩餘價値は勞働價値の割取から成り立つにしても、現實の場合に於ける利潤としては、それは差止められたる時間に對する正當なる報酬となり、資本家の苦勞、危險に對する報償となり、彼等の資本を生産的に使用せしむるための刺戟、誘因となり得るからである。たゞリカアドは利潤を與へられたるものとなし、それが本質の探索を敢て問題としなかつたがために、彼れの價値論からしては當然に出で來るべき筈の利潤論を提說し、それを明確に支持、主張することができなかつたのである。リカアドは假令利潤の本質に就て曖昧であるにしても、その實、剩餘價値說に利潤の本源を求めたのであつて、たゞ彼れの利潤論をマルクスの所謂勞働搾取說の形式をとる迄に發展せしめなかつたものである、と私は解する。次にこの解釋を若干證據立てゝ見たい。

リカアドが勞働と利潤とを對抗的のものと見、二者は全體の二分せられたるものであつて、一方が尠ければ他方が多い、といふ見解にあることは、彼れの

著書の到る所に於て見出すことができる。今その主なるものを若干抽き出して見よう。

『勞賃として支拂はるゝ割合如何は、利潤の問題に關し最も重要なるものである。何故なれば、利潤が、勞賃の低いか又は高いかに正確に比例して、高いか又は低いかであることは、直ちに睹易き理であるからである。[1]』

『これらの貨物の相對價値に些の變更を惹起すことなしに、勞賃は二〇パアセント騰貴し、其結果利潤が大なり小なりの割合を以て下落するであらう。[2]』

『利潤の下落がなければ、勞働の價値の騰貴は有り得ない。若し穀物が農業者と勞働者との間に分配さるゝのであれば、後者に與へらるゝ部分が大であればある程、前者にはより少しゝか殘らないであらう。[3]』

『貨幣價値の變更より起る勞賃の騰貴は、價格の上に一般的影響を及ぼす、さうしてこの理由よりしては、それは利潤の上に何等眞實の結果を生じない。之に反し、勞働者が以前よりもより豐富に報酬を受けるといふ事情、若くは勞賃がその上に費される所の必要品を獲得することの困難より起る所の勞賃の

1) Ricardo, ibid., p. 21. (同譯本38頁)
2) Ricardo, ibid., p. 22. (同譯本42頁)
3) Ricardo, ibid., p. 28. (同譯本53—4頁)

騰貴は、或る場合に於ける外は、價格を騰貴せしむるの結果を生じないが、しかし利潤を下落せしむる所の大なる結果を生ずる。[1]』

『……彼等の貨物の全價値は、單に二部分に分割さるゝのみである。一は資本の利潤を、他は勞賃を構成する。

『穀物および製造されたる財が常に同一の價格で賣れるものと假定すれば、利潤は勞賃が低いか或は高いかに比例して高く或は低くなるであらう。しかし假りに穀物は、それを生産するにより多くの勞働が必要であるから、價格に於て騰貴するとするも、その原因はその生産に餘分の勞働量が要求されない製造貨物の價格を高めないであらう。然らば、若し勞賃が引續き同一であれば、製造業者の利潤は同一に留まるであらうが、若し勞賃が穀物の騰貴と共に騰貴するならば、――このことは絶對的に確かであるが――彼等の利潤は必然的に下落するであらう。[2]』

『利潤率は勞賃に於ける下落によつてにあらずんば決して增加され得ないこと、並びにそれに勞賃が費さるゝ所の必要品の下落の結果以外には、勞賃の

1) Ricardo, ibid., p. 41. (同譯本79—8頁)
2) Ricardo, ibid., p. 87—8. (同譯本169—70頁)

永續的下落はあり得ないといふことを説明するのが、本書を一貫しての私の努力であつた。[1]』

『一二〇頁を見よ、そこで私は、穀物の生産に如何なる容易さ又は困難さがあつても、勞賃および利潤を合せたるものは、同一の價値を有するであらうといふことを、説明しようと試みた。勞賃が騰貴するときは、そは常に利潤の犠牲によるのであり、そしてそが下落するときは、利潤が常に騰貴する。[2]』(註)

(註)・同樣の意義の文句は他にもある。

『勞賃としてより少しのものが占有さるゝに比例して、より多くが利潤として占有さるゝであらう、又その反對のことが言へる。[3]』

『……そして勞賃を增加せしむるものは總て必然的に利潤を減少する。……何故なれば勞賃に於ける騰貴以外には何物も利潤に影響し得ないから……

『……しかしこの事實を認むるも決して、利潤は高い或は低い勞賃によつて定まる……との理論を無效にするものではない。[4]』

『總ての場合に、同一額なる七二〇磅が勞賃と利潤とに分割されなければならぬといふことが亦わかるであらう。若し土地からの粗生生産物の價値がこの價値に超過するならば、その量の如何に拘はらず、そは地代に屬する。若し超過がなければ地代はないであらう。勞賃或は利潤が騰貴又は下落しようとも、この七二〇磅の額があつて、そこからそれらのものが用意されなければならぬ。一方に於て、利潤は、決して、この七二〇磅の多くを吸ひとつてしまつて、勞働者に絶對必要品を給するに十分なる丈けを殘さない程に、高くは騰貴し得るものではない。他方に於て、勞賃は、決して、この額の如何なる部分をも利潤として殘さない程に、高く騰貴し得るものではない。[1]』

『斯くて吾々は、再び、吾々が以前に立てんと試みた所と同じ結論に達する、――即ち總ての國および總ての時代に於て、利潤は、地代を生まない所のその土地の上に於て、又はその本を以て、勞働者に必要品を給するに要する勞働の分量如何によつて定まる、といふことである。[2]』

『然らば斯くの如くにして、私は、第一に、勞賃の騰貴は貨物の價格を高めないであらうが、しかし常に利潤を低くするであらう、といふこと……を説明せんと試み來つたのである。[3]』

『私は惟ふに、利潤は勞賃に依存する、そして勞賃は勞働の需要供給並びにそれに勞賃が費さるゝ所の必要品の生産費に依存する。[4]』

『私は勞働の下落(恐らく騰貴の誤りならん)以外に、利潤の下落の原因を知らぬ。[5]』

これらの文句によつて瞭らかなるが如く、彼に在りては、利潤と勞賃とは或

1) Ricardo, ibid., p. 112. (同譯本217頁)
2) Ricardo, ibid., p. 398, note. (同譯本380頁)
3) Ricardo, ibid., p. 404. (同譯本393頁)
4) Ricardo, ibid., p. 96—7. (同譯本188—90頁)

1) Ricardo, ibid., p. 91—2. (同譯本179—80頁)
2) Ricardo, ibid., p. 105. (同譯本204頁)
3) Ricardo, ibid., p. 107. (同譯本206頁)
4) Letters of Ricardo to Malthus, p. 120.
5) ibid., p. 197. なほ Letters of Ricardo to McCulloch, p. 72. 參照

る一定の價値量額の相分たれたる兩部分であるから、この二者は相對的に對抗的なる關係にあるものであるが、しかしこのことは直ちに必然的に利潤は勞働によつて產出せられたる價値を割取することからして成り立つとする勞働搾取說に導くものではない。蓋し彼にありては、間接勞働も亦直接勞働と同じく、價値の構成に與かるものとせられ、この二者の間に價値形成的勞働としての差別が何等横はることなく、隨つて不變資本、可變資本の資本區別が明確に主張せられてゐないからである。繰り返へして言へば、利潤と勞賃とは相互に對抗的なる關係にあると云ふも、利潤の本源は明らかに勞働力にのみ求められてゐないが故に、利潤が所謂剩餘價値から成立するとなす勞働搾取說は、彼に在りては、明瞭に主張せられてゐないのである。そして何故に彼がこの點に於て徹底しなかつたかと云ふに、それは彼が利潤の存在を自明のことゝし、そが因つて來るところを究明するに興味を有たなかつたことにもよるであらうが、理論的には、既に屢々言つた如く、彼が可變資本と不變資本との區別をなし得なかつたこと、勞働力の觀念を缺いたこと、生產價格と價値とを識別し得ず、隨つて利潤と剩餘價値とを混同したことなどに歸すべきであらうと思ふ。しかし乍らリカアドに在りては、利潤の本質に對する見解が明確に表現せられてゐないにしても、彼れの價値論および勞賃論の構成內容は、剩餘價値の思想を容るべく、實質上殆んど十分なる程度に迄成形せられてゐたのであるから、彼れの利潤論はその實勞働搾取說乃至剩餘價値說であつたと云ふもさして差支ないわけである。

かくリカアドが勞賃と利潤とは或る一定價値總額の相分割せられたる兩部分であるとなすことは、直ちに剩餘價値說に導くに至らないのであるが、それにも拘はらず彼れの利潤論が、その實、剩餘價値論であるとなすは、右の彼れの態度と相俟つて、彼が勞働の價格卽ち勞賃は勞働者の受くる所の生活資料の價格によりて定まり、さうして彼が生產するところの生產物の價値、價格はそれより大であることを屢々言つてゐるに因る。これらのことに就ては、既に第一篇第五章、及び前章に於て、詳しく吟味したるところであるから、――これらの點に於ける缺點も同時に指し示した――茲には再び繰り返へすこと

をしない。兎に角彼は、事實上、勞働力の價値を生産するところの勞働分量と勞働力が産出するところの勞働分量とは異なり、その差額は利潤を成すとせるに拘はらず、その何故に然るかを問題とせず、隨つて剰餘價値なる概念に到達せなかつたのである。而してこのことは、前章に於て瞭にせるが如く、主としてリカアドが勞働者の働く勞働時間の一部分が彼れ自身の勞働力の價値の再生産であることを理解しなかつたことに歸するのである。

要するにリカアドに在りては、利潤の本質に就て大體正當なる理解があつたにしても、剰餘價値の源泉および性質は、明瞭に理解せられず、剰餘勞働と必要勞働とを加へたるもの卽ち總勞働時間は、或る確定せる大いさとして觀察せられ、剰餘價値の大いさの差異は看逃され、資本の生産力――剰餘價値への强制、卽ち一方に絶對的剰餘價値への强制、他方に必要勞働時間を短縮せんとするその內的衝動は、認められず、隨つて資本の歷史的權能は發展せられなかつたのである。[1]

リカアドは不十分乍ら、實質上、剰餘價値說をその根柢に於て支持したもの

1) Marx, a. a. O., S. 125.

と見るべきであるといふも、それはたゞマルクスの所謂相對的剰餘價値について云へるにすぎない。彼に在りては、總勞働價値は與へられたるものとして前提せられ、勞働者の生活資料を生産するところのその社會的勞働の生産力が大となるか小となるかに從ひ、剰餘價値は或は大となり或は小となる、と云はれてゐるにすぎない。絶對的剰餘價値については、彼は少しも關說するところがなかつたのである。このことについては、彼は少しも吟味すべき多くのものを有つてゐるが、こゝには餘り必要でないから說くことをせぬ。

以上述べたる所を要約すれば、リカアドは、勞働力の價値を正當に決定し得ず、延いて不變資本と可變資本との區別に到達することができずして、間接勞働と直接勞働とは俱に等しく、何等その間に差異なくして、價値形成に與るものとしたるがゆゑに、剰餘價値の發生を感知せず、利潤の剰餘價値よりの轉形なることを、明瞭に理解するに至らなかつたものである。併し乍ら彼れの經濟理論には既に、(一)勞働の價格卽ち勞賃は生活資料――たとひこゝに生活資料は、彼に依れば、勞働力の再生産に必要なるそれを意味せず、勞働者の受くる

ところのそれを意味してゐるにしても――の價格に依りて決定せられてゐること、(二)勞働者の生産するところの生産物の價値は、勞働の價値より大であること、(三)利潤と勞賃とは或る一定價値額の相分割されたる兩部分であり、隨つて一方が大であれば、他方が小であること、などが提言せられてゐるのであるから、否寧ろ彼れの經濟論は、これらの提言をその主なる內容としてゐるのであるから、彼れの價値論が、餘剩價値說を容るべく、實質上、殆んど十分に成形してゐたことは、疑ふべくもないのである。

二

リカアドは、右述べたる所により知らるゝ如く、利潤の本質、源泉に就ては、深く詮索するところがなかつたのであるが、このことは彼が平均利潤の現象を既に在るものと見、それが發生、成立を探索せなかつたに因る。隨つて又彼が資本の競爭により利潤が總ゆる生產部門を通じて相平均する傾向あることを指摘するに止まり、それが成立、卽ち剩餘價値の一般平均利潤化を問題としなかつたことは云ふ迄もない。彼はこれらの問題を自明のことゝして深く

觸れることをなさず、『原理』第六章、『利潤に就て』に於て、『吾々にとつて殘つてゐるのは、利潤率に於ける永續的變動の原因は何であるか。および從つて起る利子率に於ける永續的變動の原因は何であるかを考察することである』[1]と云ひて、直ちに、利潤變動の理由を釋ねてゐるのである。

リカアドに於て時偶見出される所の、社會發展に伴うて起る動的經濟現象を說明せゞとする態度は、不十分乍ら、特に彼れの地代論、勞賃論などに於て見受けるのであるが、利潤率低減の傾向の理論に於ても亦同樣に見出される。さうしてリカアドはこの態度を一貫して主として、資本增殖→人口增加→穀物需要の增進→劣等地耕作→穀價騰貴→地代發生→勞賃騰貴→利潤率低減といふ論理的進行に懸らしめてゐるのであるから、それは、根柢に於て、土地收穫遞減の法則、マルサス人口法則に依據してゐるといふことができよう。だからマルサスと同樣に、リカアドは社會發展の將來に就ては悲觀的見解を抱いてゐたものと云ふべく、隨つて又この彼れの利潤率低減の傾向の理論も同じく、悲觀的なる見地の下に在つたと云ひ得るのである。このリカアドの態

1) Ricardo, ibid., p. 87. (同譯本169頁)

度は、彼れと同樣に、利潤率低減の法則を勞働價値說に立脚せしめつゝ發展せしめた所のマルクスの態度と對比することにより、一段と興味のあるものがある。マルクスは、同じく勞働價値說に立脚しつゝ、彼れ特有の立場からして彼獨特の利潤率低減の法則を說き、それによつて資本主義生產方法の發展の運命を描いたのであり、さうして彼は、リカアドと同じく利潤率低減の事實を認め乍ら、彼と異なり、社會發展の將來に就て全然樂觀的立場にあつたものである。リカアドの平均利潤率低減の傾向についての見解は果して正當であるであらうか？　この彼れの理論は當に正しく彼れの勞働價値說と密接なる連關のもとに在るであらうか？　私はこの問題について左に若干考察して見たいと思ふ。彼れの利潤率低減傾向の理論を包括的に紹介し、これに詳密なる批判を加へることはそれ自ら一の大なる仕事を成す。こゝに目指すところではない。

さてリカアドの平均利潤率低減傾向の理論を、彼れの價値論と關聯せしむる限りに於て、吟味するについて、私は先づ第一に、彼れのこの點についての見解の要領を紹介し（その內容はかなり複雜であるから秩序的、統一的にそれを叙述紹介することは相當の骨折が伴ふ）、然る後この點に對して短評を加へる、といふ順序をとる。

リカアドの平均利潤率低減の傾向の理論は、彼れの地代論、平均利潤決定論、勞賃論などに依據し、地代、利潤、勞賃相互の關係に就ての彼れの見解に懸つてゐる。さうして彼れのこの點に就ての見解は、私の見る所に依れば、二つの部分に分たれ得る。卽ちその一つは、利潤の勞賃との相對的關係に於けるそれ自身の絕對額の減少（隨つて利潤率の低下）に就ての見解であり、他の一つは、資本額の增大に本づく利潤率の低減に就ての見解これである。俱に結局は利潤率の低下に歸するものであるが、前者の場合には、使用資本額は不動なるも利潤そのものゝ額が、勞賃と相對的に、減少することにより、後者の場合には、利潤額は不動なるも、使用資本額が增大することにより、利潤率が低下するのである。前者は主として利潤の勞賃に對する關係であり、後者は專ら利潤の地代に對する關係である、と云ふことができるであらう。先づ第一から吟味す

る。

(A) リカアドに依れば、地代を支拂ひたる後に殘りたる價値額、若くは地代を支拂はざる限界生産物の價値額は、利潤と勞賃とを構成するのであつて、二者は、一方が大であれば、他方は小である、といふ關係にあることは、既に見て來た所である。ところでこのうち最初に決定せらるゝものは勞賃であつて、その殘りを全部殘餘要求者たる企業家が利潤として獲得するのであるから、勞賃の大小が利潤の大小の決定者であるのであつて、利潤の大小が勞賃の大小の決定者ではない。勞賃は、利潤の大小に係はりなく、勞働者の生活資料の價格に依り決定せらるゝものである。

さてリカアドに在りては、社會の進歩――資本蓄積の增進、および人口の增加に伴うて農産物に對する需要は增大し、ために劣等地は耕作せられ、耕境は漸次低下するに至るものである。その結果は必然的に農産物の生産費が增大し、その價格の騰貴が齎らされざるを得ない。勞賃は、大部分を農産物に仰ぐところの生活資料の價格に依つて決定さるゝものであるから、それはかゝ

る農産物の價格の騰貴に伴うて、次第に騰貴するに至るであらう。ところで利潤と勞賃とは總價値額の相分割せられたる各々の兩部分であるから、勞賃の占むる價値部分――實物勞賃たる生活資料そのものゝ額は從前と同じであると假定するも――かかくの如く增加すれば、それ丈け利潤の占むる價値部分が減少することゝなり、結局利潤額は減少し、隨つて利潤率は低下せざるを得ないことになるのである。

右述べたることは工業利潤に就て一般的に云はれ得るにしても、農業利潤に就ては同樣のことが云はれないではなからうか、卽ち『若し粗生生産物の價値が增加すれば、尠くとも農業者は、假令勞賃として餘分の額を支拂ふも、同じ利潤率を得るのではなからうか』との疑問が起るかも知れないが、決してさうでないとして、リカアドは極力この疑問を否定する。『原理』第六章『利潤に就て』の內容は殆んどこの見解の反駁に盡されてゐる。リカアドに從へば、利潤率低減の傾向は農業利潤に就ても同樣に見出される。『何故となれば、彼は、製造業者同樣に、彼が雇傭せる各勞働者に增加せる勞賃を支拂はねばならないで

あらうのみならず、彼は餘儀なく地代を支拂ふか、或は同一生産物を取得するがために、增加されたる勞働者の人數を雇ふべく餘儀なくせらるゝであらうから、そして粗生生産物の價格に於ける騰貴は、この地代又はこの增加人數に比例せしめらるゝにすぎないで、勞賃の騰貴に對して彼に補償を與ふるに足らないであらうから。』[1]

今リカアドの例證に依るに、製造業者および農業者共に一〇名の勞働者を雇傭する場合、若し勞賃が一人につき一年二四磅から二五磅に騰貴するならば、各々によつて支拂はるゝ總勞賃額は二四〇磅の代りに二五〇磅となるであらう。しかしこの差額はたゞ同一分量の貨物を得るために製造業者の支拂ふ全增加額たるに過ぎぬのであるが、農業者の場合にはさうは行かぬ。農業生産に於ては地代の法則が支配するが故に、新らしい土地に於ける農業者は、同一の生産物を獲得すべく、より多くの勞働者、例へば一名の附加的勞働者を使用せざるを得ざるべく、その結果は、勞賃として更に二五磅の附加額を支拂はざるを得ないであらう。さうして舊い土地に於ける農業者は地代とし

1) Ricardo, ibid., p. 88. (同譯本171頁)

て正に同一の附加額二五磅を支拂ふべく餘儀なくせらるゝであらう。この附加的勞働の額丈け農産物の價格は騰貴し、そしてそれ丈け地代若くは勞賃は增加することゝなる。この場合前者は二七五磅を勞賃に對して支拂ひ、後者はそれを勞賃と地代とに對して支拂はねばならぬ。その結果農産物の價格は二七五磅に騰貴し、製造品の價格に比し、二五磅丈け高く賣れることゝなるであらうが、半面に農業者はそれ丈けを右の何れかに支拂はねばならぬから、結局二者の利潤は相一致することゝなり、農業者は決して農産物の價格の騰貴により利するところなく、獨り同一の利潤率を保有することができないのである。即ち『生産物の一定の附加的分量を得るにより、多くの勞働と資本とを使用する必要ある結果として、穀物の價格に如何なる騰貴が起らうとも、かゝる騰貴の價値は、附加的地代により、或は使用さるゝ附加的勞働によつて常に平均化せらるゝであらう。だから穀物が四磅に賣れようと四磅一〇志に賣れようと、或は五磅二志一〇片に賣れようと、農業者は、地代を支拂つた後彼に殘る所のものに對しては、同一の眞實價値を得るであらう。』[1] さうして『若

1) Ricardo, ibid., p. 91. (同譯本178頁)

しこれらの相等しい價値の中から、農業者が或る時は、四磅の小麥の價格によつて左右さるゝ勞賃を、そして他の時は、より高い價格によつて左右さるゝ勞賃を支拂ふべく餘儀なくせらるゝならば、彼れの利潤の率は、穀物の價格に於ける騰貴に比例して減少する』[1]のであつて、農業者は穀價の騰貴に依つて何等益するところなく、それに原因する勞賃の騰貴によりそれ丈け利潤を失ふことと、工業者の利潤に於けると何等異なるところがないのである。而して利潤率は、利潤額の使用資本額に對する相對的比率であるから、こゝに假定するところの利潤額變動し、資本額不動なる場合にも、利潤率は、當然に利潤額の減少に比例して、低下するに至ることは申す迄もない。リカアドに依れば、農業家の使用する資本額が三、〇〇〇磅であるとするならば、彼れの利潤額が四八〇磅であるときは、利潤率は一六パアセントであり、四七三磅に下落するときは一五パアセントに低下するのである。

(B) 右は利潤額減少、資本額不動なる場合に於ける利潤率低減の傾向に就てのリカアドの所說の一斑であるが、彼は右の場合の外、同じく社會の進步に

1) Ricardo, ibid., p. 90. (同譯本176頁)

伴うて起る現象、利潤額不動、使用資本額增加の場合に於ても、利潤率低下の傾向あることを主張する。今この場合に就て若干詮索するところあらんに、リカアドに從へば、既に屢々述べたる如く、人口增加、穀物需要の增進に伴うて、劣等地耕作せらるゝにより、生產の困難の加はる結果、同一量の生產物を得るにより、多くの資本と勞働とが使用せらるゝことにより、より多くの價値ある生產物が獲得されるのであるが、彼に依れば、その增大せる價値額はこれら勞働および資本を償ふにすぎずして、利潤として殘るところのものは依然として同じであるであらう(この場合リカアドは附加的勞働および資本からは、何等利潤發生せざるものと見てゐる)。かく利潤額に變りがないのに、使用資本額が增加するのであるから、前者の後者に對する比率卽ち利潤率は低下せざるを得ないことになる。この假定の場合に於ける利潤率低下の傾向に就ては、リカアドは、特に『穀物低價の資本利潤に及ぼす影響に關する一論』に於て論じてゐる。それに依れば、『最初の定住者の近接地に於ける沃土が悉く耕作され し後に於て、若し資本と人口とが增加するならば、より多くの食物が要求される

るであらう。そしてそれはそれ程有利なる位置を占めて居らない土地からのみ獲得さるゝにすぎないのであらう。然らば土地の肥沃度は同等であるが、生産物が生産せらるゝ場所から消費せらるゝ場所に運ぶに就て、より多くの勞働者および馬その他を使用する必要がある――假令勞賃には何等の變動が起らぬにしても――と假定するならば、同じ生産物を獲得するにはより多くの資本が永續的に使用さるゝことを必要とするであらう。例へばこの資本增加額が、穀物一〇クヲオタアの價値に相等しいとすれば、新らしい土地に使用さるゝ資本全額は二一〇クヲオタアであつて、この場合舊い土地に於けると同じ收穫が得られるにすぎない。かくて資本の利潤は五〇バアセントから四三バアセント――即ち二一〇クヲオタアに對する九〇クヲオタア――に下落するであらう。[1]』そしてリカアドに從へば、農業に於ける最も不利なる事情の下にある使用資本の利潤率が總ゆる利潤率を律するものであるから、この場合同じ農業部門に於ける第一等地に於ける利潤率も、又商業部門に於ける總ゆる利潤率も、等しく四三バアセントに迄下降するに至るのであ

1) Ricardo, An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock, Ricardo's Economic Essays, pp. 227—3. Works, p. 373.

る。

この利潤額は同じであるが、使用資本額が增加することにより、利潤率が低下するに至るといふ現象は、直接生産の困難が增加する結果、より多くの資本が使用せらるゝことから起る外に、資本(固定、流動資本)の價値が、(A)に述べたる原因からして騰貴する、即ち結局資本額が增大する、場合にも亦、當然に起り得る、とリカアドは云ふ。彼に依れば、農業者の資本は『生産物の騰貴の結果その價格が騰貴するであらう所の彼れの穀物及び乾草堆、彼れの打たざる大麥及び燕麥、彼れの馬及び牛の如き粗生生産物から成り立つてゐる』[1]から、若し假りに彼れの使用する資本が、これらの農産物の價格の騰貴の結果、三、〇〇〇磅から三、二〇〇磅に上るとすれば、彼れの利潤率は、一四バアセントから一三・八分の一バアセントに低下するであらう。

更にこの同じことが、製造業者に於て、生活資料騰貴の結果、勞賃が騰貴しためにそれに投下する所の流動資本額の增大せる場合にも、云はれ得るとしてリカアドはその例證を擧げて說明してゐるが、何故か農業者に就てはこのこ

1) Ricardo, Principles, pp. 94—5. (同譯本184頁)

とを看逃してゐる。しかしこの理由からの利潤率の低減は當然に農業利潤に於ても起るべき筈である。

以上(A)(B)の二つの場合に於て、等しく利潤率低減の傾向があるのであるから、利潤率はこの二つの理由からして、二重に低下することゝなるわけである。そしてリカアドに在りては、この利潤率低減の傾向は『幸にも屢々必要品の生産に關係せる機械の改良によつて、並びに吾々をして以前に要したる勞働の一部分を不用に歸するを得せしめ、そしてそれ故に勞働者の第一次的の必要品の價格を低下することを得せしむるが如き農業學に於ける諸發見によつて防止される』[1]のであるけれども、彼はこの事實を一時的なりとして餘り重きを置かない。それ故に利潤率低減の傾向は避くべからざるものであり、結局社會の進歩に伴うて零點に達すべき筈であるけれども、彼に依れば、かくして勞賃が價値總額を全部吸收するに於ては、『如何なる資本も何等の利潤を生むことができず、何等の附加的勞働が需要され得ず、そしてその結果として、人口

1) Ricardo, ibid., pp. 98—9.（同譯本191—2頁）

はその最頂に達するであらうから、資本の蓄積は終りを告げねばならぬ。』[1]だから『實にかゝる時期の來る長き以前に、利潤の甚だ低き率は總ての蓄積を抑制するであらう』[2]と彼は云ふのである。そは兎に角、利潤率低減の傾向は、リカアドに從へば、資本蓄積の增進、人口の增加、農產物生產の困難の增大の存續する限り、必然的にこれらの現象に隨伴し、人爲の如何ともすべからざるものと云はねばならぬ。かくて社會の未開時代に於ては、地主および勞働者の土地生產物の價値に對する割前が僅少にすぎなかつたものが、富の增進と食物を取得する困難の增大に伴うて、資本家のこれに對する割前の減少するに比例して、漸次增加するに至るものである。

さてこのリカアドの平均利潤率低減の傾向の理論は、彼の勞働價値法則と相關聯せしめらるゝことにより、如何に正當に取扱はれてゐるであらうか？私は次にこのことについて少し計り吟味して置きたいと思ふ。

リカアドの利潤率低減傾向の理論の內容は、つまるところ、資本蓄積の增進、

1;2) Ricardo, ibid., p. 99.（同譯本192頁）

人口增加、農產物需要の增大、劣等地耕作の結果、農產物生產の困難が增進し、その價格が騰貴するがために、勞働の價格は上昇することゝなり、その結果は利潤額の減少となつて、結局利潤率は低減するに至る、又は農產物生產の困難が增大せるがため、同一額の生產物を獲得するについて、以前よりはより多くの資本を投ぜざるを得ざるがゆゑに(結局同じことであるが、同一の資本額を以てしては從前よりはより少い生產物しか得られないがゆゑに)、利潤率は低下するに至る、といふにあるから、それは根柢に於て、マルサスの人口法則、土地收穫遞減の法則、更には彼れの地代論に立脚してをり、農產物の生產の困難が、人口の增殖に伴ひ、次第に增加することを、その議論の中心としてゐる。隨つて彼は文明の進步に伴うて起る機械、器具の發明發見により、一般的に農產物の生產力が增進せられ、ために勞働(力)の價格が下落するに至る所の他の傾向を顧みるところが尠かつたのである。のみならず彼は不變資本と可變資本の區別を認めず、剩餘價値率と利潤率と同視するの誤を冒したのであつて、これらの事情は延いて彼れの利潤率低減の傾向の理論に尠からざる惡影響を及

ぼしたものである。

リカアドの利潤率低減の理論が果して現實の利潤率低減の現象の眞實の說明たり得るか否かは姑く措き、彼自ら與へたる前提より出發せる所の彼れのこの問題に就ての論理的進行のみを見るならば、大體に於て、それは正當であるであらう。利潤と勞賃とに分たるべき價値部分が與へられたる場合に於て、勞賃の占むべき價値部分が、農產物生產の困難、隨つてそれが價格の騰貴により、增加するに於ては、其半面に於て、利潤の占むべき價値部分がそれ丈け減少し、隨つてそが總資本額に對する比率——利潤率が低減するに至るは自然であると云はねばならぬ。たゞ彼が(B)に於て指示する所の利潤率低減の理法に就ては、彼れ自身の理論的立場からして、若干の疑問なきを得ぬ。リカアドの云ふ所に從へば、この場合、人口增加、農產物需要の增大、劣等地耕作のため、農產物の生產が困難となるに至る時は、從前の同一分量の生產物を獲得せんがためには、從前よりより多くの資本を投ぜざるを得ざるが故に、そしてこの場合利潤額は依然として同じであるが故に、利潤額(不動)の總資本額(增加)に

對する比率卽ち利潤率は低減せざるを得ないのである。ところがこの場合たゞ同じ分量の生産物が獲得せらるゝに過ぎないにしても、以前よりはより多くの資本――勞働が投ぜられてゐることにより、それ丈けその生産物はより大なる價値あるものとなるのであるから、利潤額も亦、附加せられたる資本に伴うて增加せらるゝものではないか、隨つて利潤率も從前と異なる所がないのではないか、が考へられる。リカアドはこの場合生産物の分量は同じであり、隨つて利潤額は、資本の增大せるに拘はらず、同じであるとしてゐるが、これは、彼れの地代理論と根本的に相反する。(A)の場合は、利潤は已に生産せられたる價値部分を勞賃と共に相分割するにすぎないのであるから、その價値部分は已に與へられてをり、たゞ勞賃に相對的に利潤は增減するものであるけれども、(B)の場合は、新に資本が附加せらるゝのであるから、利潤分量が資本若くは勞働分量に依存する限り、利潤額は與へられたるものではない。この理論は、彼れの地代理論に依據する限り、當然に出で來るべき筈のものであるに拘はらず、彼は不用意に既に見たる如く『一論』に於ても、『原理』に於ても、この(B)の場合に於ける利潤率低減の可能を論じてゐるのである。より多くの資本を投じて同じ生産物を獲ることは、同じ資本を投じてより尠い生産物を獲ることを意味する。この後の場合に於ては、生産物の分量は減少しても、その價値、價格がそれ丈け騰貴してゐるのであるから、結局農業者は、同じ丈けの總價値、價格を獲るわけである。だからこの場合、(A)の場合に於ける利潤率低減の理由がなかつたならば、彼は、依然として、從前と同じ丈けの利潤を獲得すべき筈である。卽ち前の場合には、より多くの資本、隨つてより多くの利潤額、後の場合には、同じ資本、隨つて同じ利潤額があるわけであつて、何れの場合にも、利潤率は以前と少しも變はらない筈である。この理由をリカアドは氣附かなかつたのは、不用意と云はねばならぬが、彼は餘りこの場合に於ける利潤率低減の理由に重きを置かず、主として(A)の場合に於ける理由を以て、利潤率低減の傾向を說明したのである。

この勞賃の騰貴に本づく利潤率低減の彼れの理論は、畢竟利潤と勞賃とに分割せらるべき價値部分は與へられたるものであり、一方の分け前が多けれ

ば、それ丈け他方のそれが尠い、といふ命題に立脚してをり、勞賃の騰貴により貨物の價値は上騰するといふ說を極力否認するものである。であるから彼れのこの理論は、彼れの所謂修正であるに拘はらず、彼れの本來の勞働價値說に依據してゐるのである。リカアドはこの態度をば、當時の實際的興味の中心たりし利潤率下落の原因についてのマルサスその他との論爭に於て、終始一貫して支持したものであつた。

次に批評の立場を變へて、リカアドが農產物生產の困難、隨つて起るそれが價格の騰貴のみを云つて、機械の發明發見によるそが生產の容易、勞働生產力の增進、隨つて起るそが價格の下落を顧みるところ尠く、加ふるに彼が不變資本可變資本の區別を認めず、剩餘價値率と利潤率とを混同したことからして、彼れの利潤率低減傾向の理論が、純粹にして成形せる勞働價値說の自然的發展若くは歸結でないのみならず、同時にまた利潤率低減の現象の眞實の說明としてなほ不十分なるものであつたことを一言するであらう。

利潤率低減の傾向の說明は、既に早くアダム・スミスに於て見出される。彼はこの現象の說明を資本の蓄積、隨つて起る資本家間の競爭に求めたのであつたが、リカアドはかゝる理由は、この傾向の偶然的一時間現象を說明し得るにすぎないとなし、それが本源的原因を農產物の獲得困難、勞賃の騰貴に求め、そしてこの現象を彼れの勞働價値說により說明せんとしたものである。彼は利潤率の低減、農產物價格の騰貴、地代の增加、勞賃の高騰といふ目前の事實と、これに伴ふ穀物條例廢止如何の當時の實際的問題とに關聯して、この利潤率低減の因つて來る所の源泉が奈邊に在るかを究めんとしたのである。さうして彼れのこの點に對する說明は、當時の他の如何なる說明にも優りて、この現象の眞相を最もよく把捉したものではあつたが、而も猶ほそれは一般平均利潤低減の眞實の說明として不十分なるものであつた。蓋し利潤率の低減の傾向は、リカアドの擧ぐるが如き理由により、一時的に促進せらるゝことがあるにしても、その傾向はかゝる原因と離れて資本主義的生產方法の存續する限り、恆久的に見らるべき現象であり、隨つて機械の發明發見により農業生產力が增進せらるゝことにより、又は農產物の自由輸入により、それが價格

が下落するに至りたる後に於ても、猶ほ依然として利潤率低減の傾向は總ゆる生産部門に於て見出されたからである。この利潤率低減の現象は、これらの説明を外にして、なほ一段の深き研究、眞實の説明を要求したものであつた。さうしてこれに應ずるものがマルクスの利潤率低減の法則である。

マルクスに依れば、リカアドの利潤率低減の理論は二つの誤まれる前提から出發してゐる。その一つは地代の存在および増大は減退し行く農業の豐饒、生産力を條件づける、といふ前提であり、その二つは利潤率は相對的剰餘價値率と同じであり、利潤率は勞賃の騰落に反比例して騰落する、といふ前提これである。[1] 若しリカアドの如く、利潤率と剰餘價値率とを同視するならば、——勞働時間は與へられたるものとせられてゐるがゆゑに、——利潤率低減の原因は剰餘價値率低減の原因たらざるを得ない。ところが後者の低減は、かく勞働時間が與へられてゐる場合にのみ可能である。勞賃率の騰貴は農業生産力の減退、地代の發生若くは増加に原因するところの生活資料の價値が騰貴したる結果に外ならない。リカアドの

1) Marx, Theorien, II, 2, S. 179.

前提を承認すれば、彼れの利潤率低減傾向の論理的進行は當に自然である。しかるにマルクスに依れば、利潤率と剰餘價値率とを同視するのは誤であるといふのは剰餘價値率が同じか又は騰貴しても、利潤率は下落することがあり得るからである。このことは可變資本が、勞働の生産力の發達に伴ひ、不變資本との關係に於て減少する所の普通一般の場合に於て見らるゝ現象である。のみならずマルクスは農業生産力の不斷的減退に伴ふ地代漸増の事實を認めないのである。

斯樣にマルクスはリカアドの利潤率低減の理論の基本的立場を否認し、これに代ふるに彼特有の經濟論の立場からして、同じ利潤率低減の現象を説明せんとする。今その大要を述べんに、マルクスは、リカアドと反對に、資本制生産方法の發展に伴れ、機械その他の生産機關が益々進歩發達することにより、勞働生産力の不斷的増進の可能を信ずるのみならず、資本を不變資本、可變資本に分別し、利潤率と剰餘價値率との區別を瞭にし、以て彼れ獨特の利潤率低減の理論を行る。彼に依れば、かゝる勞働生産力の増進に伴ひ、可變資本の使

用に對する不變資本の使用は益々增大するに至る。卽ち所謂資本の有機的組成は益々高度に赴くに至る。例へば總資本一〇〇磅の中不變資本五〇磅、可變資本五〇磅であつたものが、勞働生產力の增進に伴ひ、漸次不變資本が六〇磅、七〇磅、八〇磅と增加するに對し、可變資本は四〇磅、三〇磅、二〇磅と相對的に減少するに至るものである、と彼は云ふ。而してマルクスに從へば、剩餘價値の大小は可變資本の大小に懸るものであり、そして剩餘價値量の總前貸資本に對する比率が利潤率であるから、もし剩餘價値率卽ち資本に依る勞働の搾取程度が同一であるならば、資本制生產方法の發達に從ひ、利潤率は次第に低減せざるを得ないのである。要するにマルクスは、利潤率低減の傾向を、勞働生產力の漸次的增進、社會的資本の有機的組成の程度の不斷的高昇の事實により、その剩餘價値說を以て說明したのであつて、彼に在りては平均利潤率低減の傾向は資本家的生產方法それ自らに歷史的に固有なる現象であり、それが法則はその生產方法の內的矛盾を示すものとせられ、その歷史的運命を描いてゐるのである。

マルクスに依れば、從來の經濟學はこの利潤率低減の現象を見、さうして『それが解釋上の矛盾せる企圖に於て腦漿を絞つた』のであるが、遂に右の法則を發見するに成功しなかつた。彼は、何故に從來の經濟學者がこの法則を發見するに至らなかつたかを、次の如き詞を以て批評してゐるのである。

『しかしこの法則は資本制生產にとり極めて重要なるものであつて、實にアダム・スミス以後に於ける全經濟學が解決せんと目指した所の神祕たるものであり、そしてスミス以後の種々なる經濟學派の差異は、畢竟これが解釋上の種々なる試みに歸するものと云ひ得るのである。しかるに從來の經濟學は不變資本と可變資本との區別について模索してゐたことは事實であるが、しかし明確にこれを法式化することを知らなかつた。又剩餘價値をば利潤から分離して說明し、一般的に利潤をばその相互に獨立せる種々なる成分——產業利潤や商業利潤や利子や地代などの如き——から區別して純粹に說明せることなく、資本の有機的組成の差異、隨つて又一般的利潤率の成立をば根本的に分析するに至らなかつた。凡そこれらの事實を思ふときは、從來の經

濟學が件の謎の解決に決して到達し得なかつたことは、敢て怪しむを要せぬわけである。[1]』

かくの如く、リカアドとマルクスとが、同じ利潤率低減の傾向を、しかも同じ勞働價値法則を以て說明し乍ら、この點に於て兩者が根本的にその態度を異にするを見るのは、頗る興味ありと云ふべきである。

1) Marx, Das Kapital, III, 1, S. 193—4. (同譯本三の二5—6頁)

第四章　リカアドの階級利害對抗の理論

以上私は第一——三章に於て、リカアドの分配論と價値論との連關を吟味することにより、加何なる程度に於て彼が地代論、勞賃論、利潤論の本質を捕捉し得たかを見たのであるが、かくして得られたるところの彼れの所得分配理論は、その實、地主、資本家、勞働者の階級對抗の所得理論を成してをり、そしてそれゆゑに彼れの分配論は當時の他の幾多の經濟學に優りて現實の生產關係をよく示現してゐると云はるゝのである。しからばこの彼れの分配論は、各階級對抗の所得理論として、如何に彼れの眼に映つたであらうか？　そして又それは階級利害對抗の理論として、如何なる意義に於ける如何なる程度の重要を有つてゐるであらうか？　それが缺陷および長所如何？　私はリカアドの分配論の吟味を終るに臨み、こゝにこの問題について若干詮索をしておきたいと思ふ。

この點についてのリカアドの立場を一言にして云へば、彼は勞働者階級の

利害に對する資本家階級のそれを代表し、而もその支配階級内に於ける相對的對立關係に於ては、地主階級の利害に對する工業資本家階級のそれを代表するものである。さうしてこの彼れの立場は封建制度に反抗して起りたる新興資本家階級の利害關係を如實に表現せるものであり、然る限りに於て、彼れのこの立場は當に自然である。私はこの問題を左に若干分解吟味するについて、リカアドの階級對抗の所得理論を、(一)地主對資本家(および勞働者、一般消費者)、(二)資本家對勞働者、の二つの階級利害對抗の關係についての彼れの所論に分ち考察し、しかる後これを概觀批評する、といふ順序をとるであらう。

先づ(一)から見る。

(一) 地主と資本家(および勞働者、一般消費者)とは階級利害對抗の關係に在る、とリカアドは云ふ。

既に見たるが如く、彼れの地代論、利潤論、および勞賃論は、ともにその基礎を彼れの價値論に置いてゐるのであるが、それらの所得理論のうちにて地代論は利潤論勞賃論の出發點とされてをり、隨つて又社會の進歩に伴うて惹起されるところの所得分配の動的現象の說明も亦、その地代論から出發されてゐる。さてリカアドに依れば、總價値のうちから地代が支拂はれたる後に殘つたところのものが、又は何等地代を支拂はない生産物の價値が、分れて利潤および勞賃を成すのであるが、たゞこの關係を靜的に見る場合には、地代と利潤とは積極的に何等對抗的なる關係に在るものではない。蓋し地代の支拂はれるのは、人口增加せられ、劣等地が耕作せらるゝに至りたる結果、限界土地よりより好條件の下に於て生産せられたる農産物の價値は、その固有の價値でなしに、限界生産物の價値卽ち市場價値に依つて等しく決定せらるゝによるものであつて、この場合利潤率は從前と同一であり、地代の支拂によりより多くも尠くもなるものではないからである。地代の發生、若くは增加により利得するのは地主であり、負擔を蒙むるのはかくして騰貴したるところの貨物を購買する一般消費者である。かく地代と利潤(更には勞賃)との關係を靜止的に見たる場合は、各階級の間に何等の對抗的利害の關係はないやうに見える。もちろん地代そのものが剩餘價値の一分配成分であると見る場合、當然

にかゝる場合に於ても、二者の間に其實利害對抗の關係があるのであるが。

ところが地主と資本家との利害關係が變動する場合、即ち社會の進歩——資本蓄積、人口增加、穀價騰貴に伴うて、これらの所得分配の關係が變動する場合、リカアドに在りては、地主と資本家との階級利害の衝突は極めて明白である。この問題は、詰る所、既に前章に於て述べたるところの彼れの平均利潤率低減の傾向の理論に懸る。そこにて詳しく吟味したやうに、リカアドは利潤率低下の傾向の存在する場合をば、利潤額不同、資本額增大の場合と、利潤額減少(勞賃に相對的に)資本額不同の場合とに分つてゐる。しかるに第一の場合は、彼れの立場からして到底許容し難きものであり、且つ彼自身もこの場合について多く語る所なきがゆゑに、問題とすべきところのものは第二の場合に限らる。既に述べたるが如く、人口增加、穀物需要の增進の結果、劣等地耕作せらるゝに至れば、穀價はおのづから騰貴するに至るものであるが、その結果は、その穀物(一般生活資料)をその主要なる生產費としてゐる所の勞働(力)の價格は、騰貴することゝなる。而してリカアドに在りては、利潤と勞賃とは與へられたる總價値部分の相分割されたる二つの部分であるから、一方が多ければ他方が尠い。今この理由により勞働の價値が騰貴し、勞賃の占むべき價値部分が增加するに至れば、利潤の占むべき價値部分が減少するに至るは必至の理である。斯樣に人口增加→穀價騰貴→地代發生若くは增加→勞賃騰貴→利潤額減少→利潤率低落、といふ過程をとることゝなることにより、だゞこの過程をとることによつてのみ、地代の上昇は同時に利潤の下落を意味し、地主と資本家との利害關係は、社會の進歩に伴うて益々相衝突せざるを得ないのである。

ところでこの發展過程に於て、勞働者と地主との階級所得關係は如何であるかを見るに、リカアドに依るに、勞働者は一般的に原則として、地代の發生、增大、穀物價格の騰貴により何等の利害の變動をも蒙らない。なぜならば、地代發生若くは增加、穀價騰貴すれば、勞働(力)の自然價格はそれだけ騰貴することとなり、勞働者は勞働(力)の價値、價格の變動あるに拘はらず、前後同一の實質勞賃——生活資料を獲得するを原則とするからである。この理により勞働者は地主と何等利害對抗の關係に在るものではない。だがしかし穀物の價値

が騰貴し、利潤が下落するに至れば、從つて起る現象は資本蓄積の緩慢であり、勞働に對する需要の減退である。その結果は、勞働(力)の市場價格がその自然價格以下に降るか、その自然價格それ自らが下落するに至るか、どちらかである。リカアドの詞によれば、『勞働者の運命はより不幸であらう。なるほど彼はより多くの貨幣勞賃を受けるであらうが、彼れの穀物勞賃は減少さるゝであらう。そして彼れの勞賃の市場率をその自然率以上に保つことが益々困難になるの結果、彼れの穀物に對する支配のみならず、彼の一般的狀態が惡化せらるゝに至るであらう。穀物の價格が一〇パアセント騰貴するならば、勞賃は常に一〇パアセントよりもより少ししか騰貴するにすぎないであらう。しかし地代は常にそれよりもより多く騰貴するであらう。勞働者の狀態は一般に退化し、そして地主のそれは常に向上せしめらるゝであらう。』[1]だからかゝる意義に於ては、勞働者と地主とは寧ろ利害相衝突する關係にあると云ひ得るわけである。

なほ、リカアドに在りては、穀物價格の騰貴、地代發生又は上昇そのものは、直

1) Ricardo, ibid., p. 79. (同譯本154—6頁)

接、資本家の利害を阻害するものではないが、社會一般の消費者の利害と直接相衝突するものである。

之を要するに、人口增加、穀價騰貴、地代發生又は增大の結果、地主は益々利益を獲るに至るも、資本家、勞働者、消費者、詰る所社會一般の利益は、地主と反對に、以上述べたるが如き理由により、益々阻害さるゝに至るものである。それゆゑにリカアドは云ふ、『それについて社會が直接の、そして地主が間接の利害關係を有つてゐる所のこれらの改良を別にすれば、地主の利益は常に消費者および製造業者のそれと相反してゐる。……穀物の生產に與る出費が增加することは地主の利益になるが、こは消費者の利益にはならぬ。……それゆゑに總ての階級——地主を除く——は穀物の價格に於ける增加によつて害せらるゝであらう。地主と一般公衆との間の諸關係は、それによつて賣手と買手との兩者が同樣に利得すると云ひ得らるゝ所の商賣上の取引關係とは異なつてゐて、損失は全部一方の側に、利得は全部他方の側に歸する。』[1]と。又曰く、『だから地主の利益は、常に社會の他の總ゆる階級の利益に反することゝなる。

1) Ricardo, ibid., pp. 321—2. (同譯本329—30頁)

地主の地位は食物が稀少で、高い時が一番繁盛であるに反し、他の總ゆる人々は食物を安く獲ることから大なる利益を受ける。[1]』と。

斯樣にリカアドに從へば、地主と資本家(および勞働者、一般消費者)との利害は相衝突するものであり、さうして資本の蓄積の增進、利潤率の高騰は國民繁盛の象徵であり、『株式所有主の利得は國民の利得であり、他の總ゆる利得と同樣に、一國の眞の富および力を增加するものである[2]』から、地代上昇の齎らすところの利潤率の下落は、地主および社會一般の利益との背反を意味するものである。リカアドがかく資本家の利益を以て社會公共の利益と看做したるに對し、マルサスは地代の上昇は社會繁盛の印であり、そは價格騰貴の原因であつて、結果ではないとなし、地主の利益と社會一般の利益とを同視したのである。リカアドは資本家階級の利害を代表し、マルサスは地主階級の利害を代表したものと見て差支ないわけである。このリカアドの階級利害の對抗關係は、彼れの意識し力調したところの階級利害對抗の唯一の關係であつて、彼れの意識に在りては、剩餘價値はたゞ地代あるのみである。アドルフ・ヘ

1) Ricardo, An Essay, Ricardo's Economic Essays, p. 235.
2) Ricardo, Principles, p. 417. (同譯本419頁)

ルト[1]はリカアドが自分自ら資本家であつたところから、資本家全體の階級の利益を、意識的に、抽象的にして論理的なる方法をかりて主張したものであるとなし、彼リカアドの個人的人格を散々に批議したのであるが、ヘルトのリカアドの個人的人格に對する誹謗の當らないのは別として、兎に角リカアド自ら意識すると否とに拘はらず、彼れが當時の新興階級の意識の裡に、その階級の利益を代表し、それを以て人類全體の利益と看做したことは疑ふべくもないのである。さうしてこのことは彼れの經濟學の歷史的重要を損ふものではない。彼れの經濟學の科學性、歷史的功績はそれにも拘はらず嚴然として科學の歷史に橫はつてゐるのである。

惟ふに總ゆる階級內に於ける第二次的階級の對抗關係は第一次的基本的階級對抗の關係が發展し、それが意識的に認識せらるゝに至る迄は、特に甚だしく顯著に現はれるものである。リカアドとマルサス[2]とは各々資本家階級、地主階級(土地貴族の階級)の利害を代表して、相互に自己代表階級の利害を人類一般の利害と共通にしたのは丁度かゝる時期に當る。當時はまだ第一次

1) Held, A., Zwei Bücher, 1881, S. 176, 183, 195.
2) リカアドとマルサスとの經濟學はともに等しく支配階級の經濟學であるに拘はらず、如何にその間に科學としての重要性の差があることか！特に Marx, "Der wissenschaftliche Charakter von Malthus und Ricardo," Die Neue Zeit, 23 II, 1905, S. 817/820. 參照

的階級對立――資本家全體對勞働者――は一般に意識せらるゝに至らなかつたのである。

かくの如くにしてリカアドに在りては、地主階級と資本家階級とは利害相衝突する關係に在り、隨つて地主の利益は社會一般の利益と相反するものであるが、しかし彼は、かゝる事情は事物の自然に本づくものであつて、人爲の如何とも爲し難いものであるとして、[1]敢て地代の沒收、地主の撲滅を叫ばうとしない。だから或る學者の云ふが如く、彼れの地代論は地主階級に對する挑戰の武器であり、地主撲滅論であるとするのは、[2]若干不穩當であると云はねばならぬ。さればと云つてその反對に、リカアドの地代論は地代と云へる不勞所得の有力なる辯護論であると解するのも亦甚だしく彼れの眞意を傷けるものであらう。リカアドは所得分配の理法を在るが儘に見たる結果、地主と資本家とは利害相衝突することを云ひ、さうして地代を社會公共の利害に反する所の不正なる所得としたことは事實であるが、それゆゑにそれを沒取すべしとか、國有にすべしとかは彼れの關せざるところであつて、このリカアドの

1) Ricardo, An Essay, ibid., p. 235.
2) 福田德三博士　社會政策と階級闘爭383―398頁

地代論を武器となし、感情的に土地國有論を唱へたのは彼れの後に出でたる土地社會主義者の連中である。リカアドの與り知らざる所である。リカアドはあく迄も『自然の秩序』を信ずる運命的經濟學者(die fatalistische Oekonomen)であつた。

(二)　資本家と勞働者との利害は、實質上、相對抗的關係に在るものとせるに拘はらず、リカアドはこの關係を深く意識、强調することを爲さず、それを(一)地主對資本家、勞働者の關係に還元した。

リカアドが屢々繰り返へし述べた所に依れば、利潤と勞賃とは與へられた價値部分の相分割せられたる二つの部分であるから、一方の割前が多ければ、他方の割前が尠い。この立場は、資本家と勞働者との階級的利害の背反を物語つてゐることは云ふ迄もない。しかるにリカアドはこの關係の眞相を深く吟味することを爲さず、この關係も畢竟地主對勞働者、資本家の利害對抗の關係に過ぎぬものとする。即ちさきに述べたる如く、彼に依れば、人口增加、穀價騰貴、地代上昇若くは發生により勞働(力)の價格が騰貴するに至れば、利潤

はそれだけ減少するものであるが、實質勞賃卽ち生活資料の分量には前後何等變はるところがない。なぜならば勞働力は一つの商品として、勞働者の必要とする生活資料の額卽ちその價値によつて決定せらるゝものであり、それが決定には利潤の大小は直接何等與かるところがないからである。しかしこの發展過程の結果たる利潤率の低落は延いて資本蓄積を阻害し、勞働需要を減退せしむるがゆゑに、この理由からして勞賃も亦利潤と同樣に地代の上昇と反比例に下落するに至るものである。斯樣に勞賃變動の原因を地代の變動に懸らしめ、利潤の變動に懸らしめることがなかつたことは、彼れの前提から來る必然の歸結であるにしても、しかしそはたゞ所得分配の表面的變動の一つの場合を說明せるものにすぎない。勞賃、地代、および利潤に分配される總價値部分は如何にして發生し、さうして如何なる基本的規定又は關係に於て分配されるか？　この基本的關係は他の諸々の表面的變動を基礎づけるものであり、それが闡明は、詰る所、資本家的生產方法に特有なる本質的なる階級利害の衝突の實相を暴露する所以であるが、リカアドは意識的に特にそ

れに觸れるところがなかつた。彼は勞働力の決定、利潤、地代の本源、餘剩價値の發生について正しい理解がなく、それらをたゞ與へられたるものとなし、その因つて來る所を瞭にしなかつたが爲に、資本家(地主)と勞働者との關係は、資本家的生產方法に本質的に相對抗する唯一の關係であることを意識しなかつたのである。本質的に存在するものは地主對資本家、勞働者の利害對抗の關係ではなく、地主、資本家對勞働者の利害對抗の關係なのである。勞賃、利潤、地代の所得分配關係の基本的規定は、リカアドに在りては、皆これ自然的恆久的の現象であつて、歷史的現象ではない。又彼に於ては、所得分配關係はたゞ流通行程、分配行程に於てのみ存在し、生產行程に於て存在するものではない。生產行程に於て物的生產手段の所有者たる資本家とたゞ勞働力をしか有つてゐない所の勞働者との對立、搾取者と被搾取者との對立は、彼れの明確に意識詮索しなかつたところである。彼が、分配の基本的規定、本質的なる階級利害衝突の關係についての正しい觀念を缺く所以である。たゞしかしこの種の階級利害衝突の理論の萌芽が、若くは實質的基礎が、彼れの勞働價値論、特に

利潤と勞賃との關係についての彼れの見解に見出されることは云ふ迄もない。マルクスに依れば『古典學派經濟學の最後の偉大なる代表者リカアドは、遂に階級的利害の對立を、卽ち勞賃と利潤、利潤と地代との對立を、ナイイフに社會的自然法則と解して、これを意識的に彼れの研究の出發點たらしめたものである。』[1]

之を要するに、斯樣にリカアドの經濟學は利潤の存在、勞賃の決定、およびこの二者の關係について、卽ち資本家(地主)對勞働者との階級利害の對抗の關係について、實質上、可成り十分なる程度に於て、說明してゐるに拘はらず、リカアドが敢てこの關係を强調するところなく、階級利害對抗の關係をばたゞ資本家と地主との間に求め、工業資本家階級の利益を以て社會一般の利益と看做したことは、當時は新興の資本家階級が封建制度の沒落に勝利の凱歌をあげ、資本主義制度に本づく異常なる勞働生產力の發達に醉ひ、さうしてその果實を享樂しつゝあつた時代であり、且つ又資本主義制度內に於ける勞働者對資本家の階級利害の鬪爭は、たゞ潛在的に存在してゐるか、又はたゞ僅かに表面

1) Marx, Das Kapital, I, Volksaus. Nachwort zur 2 Aufl., XLI.

上にボツ〳〵現はれ始めた時代であつたことからして、當に自然であると云はねばならぬ。かゝる事態の下に於ては、支配階級の代表者が自分自らを一の階級の代表者なりと意識せず、全人類の代表者なりと思惟し、資本主義制度をいつ〳〵迄も發展支持することは人類それ自らが固有に所有せる權利なりと考へるは當然なのである。さうして又支配階級が被支配階級との利害衝突を見るも、それを力調することをなさず、それ自らの階級內に於ける第二次的階級間の利害衝突——資本家對地主——の說明に沒入し、各階級の代表者が各々自ら勝手に人類利益の代表者なりと僭稱するは寧ろ自然の成行なのである。

結論

リカアド價値論の本體概觀

以上私は本論第一、二篇に於て、リカアド價値論の構成内容を、第三篇に於て、それと係はる限りに於て彼れの分配論を、即ち結局その本質を、それが缺陷と歴史的貢獻、重要とを並び認めつゝ、吟味したのであつて、リカアド價値論について問題とすべきものは、不十分乍ら、大體に於て研究し了へたつもりである。

リカアドは現實の諸經濟現象――彼に在りては諸分配現象――の眞相を闡明せんとして、貨物の交換はそれが生産に費されたる勞働の相對的分量により決定、測量せらるゝ、との本來の形に於ける勞働價値說から出發し、支配勞働――勞賃と費消勞働との異同を辨じ、前者でなしに後者こそ交換價値の實在的基礎であることを瞭にし、資本を分解しては、それを蓄積勞働、間接勞働に

還元し、直接勞働と共に、價値決定に與かるものとなし、更に進んで地代の發生は決して勞働價値法則を攪亂、排除するものではなく、その反對にそれに依存して初めてその本質が瞭にせらるゝことを主張し、以てアダム・スミスに反對して、勞働價値法則の現實の資本家的社會に於ける總ゆる經濟現象を實在的に規制するところの中樞的法則であることを、十分とは言へない迄も、瞭にせんとしたのであつて、既に屢々言へる如く、まことにこのことはリカアド經濟學の偉大なる歴史的功績を成すのである。

ところが本論第二篇に於て吟味したるが如く、彼は異なれる生産部門に於ける固定資本流動資本の使用の種々なる場合――四つの場合――に於て、即ち資本の有機的組成の異なれる場合に於て、貨物の交換價値(その實生産價格)は必らずしもそれが生産に費されたる勞働の分量によりてのみ決定せられない現實の事實に當面し、遂にそれに一種の制限を加へ、僅かの程度に於てゞはあるが、利潤、勞賃も亦それが交換價値の決定に參與することを云つたのである。

この所謂リカアド價値論の修正の内容および批判については、本論に於て詳しく吟味して來た所であるが、この所謂修正はリカアドの價値論に極めて重大なる影響を及ぼし、ためにそれが本體について、さうして又一般的に勞働價値說の本質について、諸々の誤解を生む基となつたと同時に、それ丈けにその修正を惹起したるところの價値と生産價格、勞働價値法則と一般平均利潤率の法則との矛盾、二律背反の事實は、總ゆる勞働價値說のいつかは逢着するところの最難關であり、隨つて又その最も重要なる理論的解明を要求するものである。それゆゑに、かくして修正せられたる後に殘つたところのリカアドの價値論の本體は一體何であるかを吟味し、その修正に對する彼れの態度の眞相を闡明批評することは、リカアド價値論の歴史的貢獻の程度を卜する所以である。この點については既に本論に於いても若干闡說するところがあつたが、この研究を終るに際し、私は、この問題についてなほ一段の吟味をなし、以てリカアド價値論本體の概觀に代へたいと思ふ。

私は先づリカアドの修正の後に殘つたところの彼れの價値論の本體は一

體何であるか、それは生產費說であるか、勞働價値說であるか、について の二つの解釋、並びにかゝる解釋を容れ得べきリカアド自身の相矛盾せる言說、態度を吟味し、しかる後この矛盾の現象を認め、それが解明に惱んだ彼れの態度こそ――たとひその矛盾の現象を十分に說明することはできなかつたにしても――その然らざりし當時の諸々の學者と異なり、彼をして科學の歷史に於てそれらの學者に優りて一段の高き地位を占めしむる所以であることを主張し、このリカアドの態度についての諸々の解釋、批評の概ね當らないことを瞭にするであらう。

このリカアドの所謂修正は、彼れの純粹なる形に於ける勞働價値論に對して、果して如何なる意義の如何なる程度に於いて、重要を有つてゐるであらうか？　それは彼が勞働價値說を拋棄し、代へるに生產費說を以てしたことを意味してゐないであらうか？　先づリカアドの價値論は結局生產費說として殘つたものであるとする解釋、および その解釋を容れしめるが如きリカアドの言說を詮索して見る。

(A)　本論第二章第一節に於て述べたるところの、リカアドの本來の形に於ける勞働價値論は、ひとり原始社會にのみ適用さるべきものとせられてゐるとする所の論者は、この修正に重きを置き、それはリカアド勞働價値說の拋棄を意味するものであつて、後に殘つたところの價値說は畢竟一種の生產費說にすぎずして、それこそ彼が現今の資本家的社會に於ける價値論として當に主張せんとするものに外ならないと云ふ。

マーシャルがこの解釋をとる一人であることは云ふ迄もないが、なほ彼れの外にこの解釋をとるものは可成りに多い。例へばディールは『リカアドが最初に立てた勞働原則に對して爲した樣々の煩雜や修正やによつて、彼は生產費論者に數へらるべきであり[1]』、『リカアドに從へば、終局に於て、財貨の價値を規制する所のものは「勞働」にあらずして「生產費」である[2]』と云つてをり、又カツセルも『リカアドは、その往々かなり珍妙なる抽象と前提とによつて、結局何を主張したのであるか？　この問題に對する答解としてはたゞ次の答解ある

1) Diehl, Handwörterbuch der Staatswissenschaft, II Aufl., VI, S. 430. od. III Aufl., VII. S. 125.
2) Diehl, Erläuterungen, I, S. 50.

のみである、――リカアドは、全價値構成を生産費によつて説明せんがために、實際の生産に協力せる種々なる要素をたゞ一つの要素に引き直ほさんとした[1]』と云つてゐる。(註)

(註) これらの學者の外にこの解釋をとるものにスチュワアト[2]、ベエム・バワアク[3]、クニース[4]、レキシス[5]などがある。今一々こゝに擧げぬ。

以上紹介したる所の學者は、リカアドの勞働價値説に對する修正を特に重要視して、彼れの價値論は勞働價値論と云はんよりは、寧ろ一種の生産費説なりと解すべきであるとするものであつて、この解釋の基礎は、その『原理』第一章第四、五節に於て爲されたる所の修正のほかに、一八八七年以後ボナア、ホランダアなどに依つて出版公表せられたる所の彼の書翰集に於て現はれたる彼れの見解、態度をその主なるものとする。今これらの書翰集に就て、吾々をしてこの解釋を最もよく容れしめるであらうが如き彼れの書信を搜し見るに、さし當り彼れが一八二〇年三月二日マカロックに宛てたる手紙に左の如きものがある。

1) Cassel, "Die Productionskostentheorie Ricardo's und die ersten Aufgaben der theoretischen Volkswirtschaftslehre," Zeitschrift für ges. Staatswiss. 1901, S. 71—2.
2) 3) Böhm-Bawerk, "Zur neusten Literature über den Wert," Conrad Jahrbücher, 1891, S. 71—2.
4) Knies, Kredit, II, S. 61.(この書唯今手元になし Rosemberg, a. a. O., S 34.に據る)
5) Lexis, Worterbuch der Volkswirtschaft, 1898, II, S. 887.

『私はこの問題に就てよく考慮したる後、貨物の相對價値に變化を惹起す原因が二つあると思ふ。(一)は貨物を生産するために必要なる勞働の相對的分量であり、(二)はかゝる勞働の所産が市場に齎らされるまでに經過しなければならぬ相對的時間これである。固定資本に就ての總ゆる問題は、この第二の規則の下に來るのであつて、私は貴下が御望みならば、それを説明するであらう[1]。』

更にリカアドが同年六月十三日附マカロックに宛てたる書翰は、この態度を最もよく現はせるものであつて、(その一部分は)屢々引用せらるゝ所のものである。

それに於て彼は最初に『私は、貨物が市場に運ばれる迄の相對的時間が、その價格、若くは寧ろその相對的價値に及ぼす影響を説明するに就て、若干の困難を伴ひはすまいかを怖れる[2]』と云ひて、例を擧げて詳しく説明したる後、左の如く言つてゐる。

『だからして嚴密に言へば、貨物に費されたる勞働の相對的分量は、勞働のみ

1) Letters of Ricardo to McCulloch, p. 65.
2) Ricardo, ibid., p. 69.

がそれに費され、而もともに同じ時間費されたる時にのみ、その相對的價値を規制するものである。……

『私は、若し私の著書にある價値に就ての章を書き直ほすとすれば、貨物の相對價値は、一つの原因でなしに二つの原因に依つて規制せらるゝと云ふことを承認するであらう、と時として思ふことがある。その二つの原因とは、問題とする所の貨物の生産に必要なる相對的勞働分量と資本が休止してゐる(投ぜられてゐる)時間に對する、卽ちその貨物が市場に齎らされる迄に對する利潤率とを指す。[1]』(註)

(註) なほ左の彼れの書翰も亦、彼が生産費論者であつた證據を示すものとして、屢々擧げられる所のものであるが、しかしそれらは右に擧げたるもの程に强くその勞働價値說に對する單なる修正若くは制限のことを示してゐない。それらはその勞働價値說に對する單なる修正若くは制限たる以上の意味を表はしてゐない、と私は思ふ。日附順にそれらを左に引用する。

一八一八年一月三〇日附マルサス宛――『だから更に角需要供給が唯一の價値規制者ではない。キング卿や貴下が需要供給に依つて何を意味せしめらるゝやを知り度いものである。如何に需要が大であつても、それは決して永久的に貨物の

1) Ricardo, ibid., p, 71.

價格をその生産費――それに生産者の利潤が含まれる――以上に上げることはできない。だからして永久的價格の變動の原因を生産費に求めることは當然であるやうである。[1]』

一八一八年一一月二四日附マカロック宛――『私は、明に、私の著書(原理のこと)に於て、資本の持續性が同じでない場合には、價値は勞働の分量に依りてのみ決定せられない、と云ふことを述べて置いた。[2]』

一八二二年五月一九日附マカロック宛――『貴下は、貨物の價値をそれが生産に必要なる勞働の分量に依りて測定することに於て、私より若干過ぎてゐる。貴下は何等の例外、制限を認めざらんとするが如くであるが、私は、貨物の相對價値の諸變化のあるものは、それを生産するに必要なる勞働の分量以外の原因に歸し得べきことを常に認めようとするものである。若しも百個の煉瓦の高價なる機械に依つて生産せられたるモスリンの或る一定の分量に對する相對價値が變動したとするならば、それはこの二つの原因の何れか一つに歸するであらう。――その何れが生産する爲に必要なる勞働が增加したか減少したか、若くは勞賃が一般的に騰つたか下つたか、その何れかであらう。第一のものが(價値)變動の原因なることに就ては、貴下と私とは全く同意見である。然し貴下は、同じ勞働分量がそれぞれ煉瓦とモスリンとに投ぜらるゝにかゝはらず、その相對價値は、勞働の價値が騰り若くは下つたが故のみに依つて、變化すると云ふことを認められないがやうで

1) Letters of Ricardo to Malthus, p. 148.
2) Letters of Ricardo to McCulloch, p. 14.

ある。しかもこの事實は私には否定すべからざるものゝやうである。この第二の原因に就ては、私はマルサスやその他のものゝやうに、多くの重要を認めないけれども、全然それに對して目を閉ぢるわけには行かない。[1]』

一八二三年八月二一日附マカロック宛――『貨物(の價値)がかくの如く利潤の變化の爲に變動する時に、貨物の生産に必要なる勞働の分量以外に、他の變動の原因はないと確言することは正しいであらうか？それは正しくない。實際上貨物(の價値)が利潤の變動に依つて變動するのはホンノ僅かである、と云ふのは利潤は一般的に極めて少しゝか變動することがないから。しかし私は、それかと言つて若し利潤が變化するならば、貨物も亦變動すると云ふことを認めざらんとするものではない。[2]』

右に引用したる二つの書翰に於ては、リカアドが價値の變動原因として勞働の外に利潤、勞賃をも認めること可成强きがやうである。しかし彼れが、それに於て、若し價値に關する章を書き直ほせば、價値決定の原因として二つの原因を認むるであらうと云ひて(一八二〇年)、その翌年五月『原理』第三版を出し、さうしてそれには、各々固定資本と流動資本との組合はせ異なるか、若くは固定資本の持續性異なる場合に於て、利潤、勞賃の價値變動に及ぼす影響を論ず

1) Ricardo, ibid., pp. 131—2.
2) Ricardo, ibid., p. 178.

ることが一層詳しいのであるから、右書翰に現はれたる價値の修正も、『原理』第三版に現はれたるそれ以上の程度のものでないことが容易に想像し得られる。なほリカアドは、勞働價値說に執着すること餘りに甚だしきマカロックに對しては、マルサスに對するとは反對に、常に勞働價値論の修正せられざるべからざることを論ずること頻りであることから考へても、右の書翰に現はれたる修正に餘り重きを置くのは如何かと考へられる。

リカアド價値決定要素として、勞働の外に利潤、勞賃をも認めるに至つたこと、換言すればその本來の形に於ける勞働價値說を緩和するに至つたことは、その書翰集に於ても現はれてゐる如く、價値問題に關して朋友と論戰熟慮したる結果、漸次年月の經過と共に、その程度を强めて來たのであるが、このことはその『原理』の第一版、第二版及び第三版を相互比較し、その修訂增補せられたる跡を見ることに依つても亦知ることができる。

『原理』第一版と第二版との間には大した差異はない。第二版に於ては、第一章を第五節に分ちて各々の節の頭に見出しが附加されたること、處々に於て

字句が變更訂正せられ、ならびに章句が置き換へられたることの外、第一版に全然なかつた所の提言、即ち(異なりたる生産部門に於ける固定資本と流動資本との組合はせの割合が異なれる場合、若くは固定資本の持續性に差異ある場合の外)流動資本の使用者に歸つて來る時間の異なれる場合に於ても亦、勞働以外の原因に因つて價値の變動が惹起されると云ふこと――彼がその修正を一段と押し進めたことを意味する――が追加されてあるに過ぎない。

(註) 第一版になくして第二版に附加されたこの唯一の追加は左の如きものである。

『流動資本は甚だ一樣ならざる時間を以て循環する、即ちその使用者に回收さるるであらうと云ふことも亦注意すべきである。農業者に依つて種蒔の爲めに買はれたる小麥は、パン燒人によつてパン製造の爲めに購はれたる小麥に對しては、比較的に固定資本である。前者は小麥を土中に遣し去り、而して一年間は何等の報酬を得ることができない。後者は小麥を挽いて粉となし、それをパンに製造して彼れの顧客に賣り、而して彼は一週間の中に前と同一の仕事を再びするために、或は他の仕事を始めるために、彼れの資本を自由になし得るのである。[1]』

1) Ricardo, Principles, 2nd ed., p. 21. (第一版23頁 again two manufacturers ……の章句の次に這入るもの、第三版にもその儘存續 Gonner's ed., p. 25. (同譯本 46—7頁)

『流動資本の持續性が異なれる場合にも、同じ結果が起るのであらう。同じ資本が投ぜられてゐる二つの異なれる產業の性質から、一の製造業者は彼れの生產した貨物を一年經たゝねば市場へ齎らすことができないのに反し、他の製造業者は三ケ月にしてその貨物を市場に齎らすことができるとすれば、第一の貨物の第二のものに對する相對的價値は、勞賃の騰貴、利潤の下落に伴うて下落するであらう、このことが眞であると云ふことを證明するために、更に計算することは必要ではない。何故と云ふにそのことは、既に考察した場合即ち二つの同じ資本の持續性の程度の異なれる場合と全く同じ原則に依據するものであるから。[1]』

ところが第三版に至つて可成り多くの增訂が施された。さうしてそれらは主として、勞働價値說の制限を以前よりはより多く重要視して來たことを示してゐる。即ち先づ第一に、舊版に貨物の交換價値は專ら(solely)[2] 各貨物に費されたる勞働の比較的分量に依る、とあつたが、新版に於ては殆んど專ら(almost exclusively)[3] と訂正せられ、又第二版(第一版にはない)第二節の見出し――『資本の蓄積は前節に於て述べたる原則を何等變更するものでない[4]』その節の最初に見出される章句、――『私が四頁に於て「諸國民の富」から抽き出した引用によつ

1) Ricardo, ibid., p. 36. (第一版38頁の These result ……の章句の前に這入るもの)
2) Ricardo, Principles, 1st ed., p. 4. 2nd ed., p. 3.
3) Ricardo, ibid., 3rd ed., Gonner's ed., p. 7.
4) Ricardo, ibid., 2nd ed., p. 14.

て次のことがわかるであらう、――たとひアダム・スミスは、諸物を獲得するに必要なる勞働の分量の割合は、それらが相互に交換するに當つての規則を與へる唯一の事情であるといふ原理を十分に認めたとは云へ、彼はその原理の適用を、資本の蓄積、土地の占有に先だつ初期野蠻の社會に限り、利潤および地代の支拂はるゝ時には、恰もそれらは、貨物の生産に必要なる勞働の單なる分量と離れて、その貨物の相對的價値に何らかの影響を與へるものであるかの如くに取扱つた[1]』、及びそれに引き續けるなほ一つの章句を削除してしまつた。次に彼は第二版に於て第一章を五節に小分したのを、新版に於てそれを七節に小分し、固定、流動資本の廻轉の差異が貨物の交換價値の變動に及ぼす影響をば、特に前よりはより詳細に論じたのみならず、その附加せる第七節に於て、價値の不變尺度の到底存在すべからざることをより精しく示さうとした。

凡そこれらの原理に於ける修訂增補は、リカアドが漸次その勞働價値說に對する修正を重要視するに至つたことを示すものであるが、しかしその程度を修正以上のものとはどうしても解することができないのである。

1) Ricardo, ibid., 1st ed., pp. 15—6. 2nd ed., pp. 14—5.

(B) 以上私は、リカアド價値論の所謂修正に重きを置き、彼れの價値論は結局一種の生産費說として殘つたものに過ぎない、とする二三の論者の說を擧げ、且つこの解釋の論據を供するが如き、彼れの書翰集およびその『原理』の諸版の間の差異に於て見出される彼れの態度を檢討し、この解釋に遽に參ずることのできないことを瞭にした。ところがこの解釋に對して、リカアドの價値論は、その修正あるに拘はらず、依然として勞働價値論として殘つたのであるとして、その所謂修正に重きを置かざるものがある。

例へばローゼンベルグはこの點に就て左の如く云ふ。

『リカアドが價値法則よりの背離を承認したことは確である。更に彼がこの背離の射程を全く認めなかつたことも確である。しかし吾々は、彼はこの背離をたゞ現實に對する讓歩として承認したのであると云ふことを忘れることができないし、又忘れてはならない。彼れの全體系は勞働價値の基礎の上に立ち、この「變形」を全く考慮の外に置いてゐる。若し第一章第四節及び第五節を拔くならば、この「原理」は、一つの章句に至る迄、依然として同じであつて、

何等の修正をも必要としないであらう。若しリカアドに於て勞働價値法則を無視するならば「原理」は全一の、論理的の、全體たらざるに至るであらう。[1]』

ドゥニースも亦この解釋をとれる一人である。彼は云ふ。

『この價値の測定の單位がリカアドの支配的思想であることは、彼がその根本的原理に制限を加へたる後と雖も、猶且つそは、外見上、同じく絶對的に、地代、利潤理論の極めて重要なる章句の裡に再現してゐる程である。[2]』

更にアシュレイは、『リカアドの復活』なる論文に於て、マーシャルがリカアドの價値論を生産費説であると解し、しかもそれはジェヴンスおよび墺太利學派の效用價値説と必らずしも相衝突するものでないとするに反對し、リカアドの價値論は修正せられたるに拘はらず、依然としてその本質上勞働價値論の上に立つてゐることを主張する。アシュレイはその理由として左の三つを擧げて各々について詳さに述べてゐる。

(一) リカアドはこれらの修正が彼れの學説の本質に觸れるものとは考へなかつた。隨つて彼はロードベルタスやマルクスが用ひた言葉と區別する

1) Rosemberg, Ricardo und Marx als Werttheoretiker, S. 29.
2) Denis, Histoire des systemes économiques et socialistes, Vol. II, p. 151.

ことができない言葉によつてその學説を引き續き述べてゐる。

(二) 彼れの最も有力なる祖述者や解釋者は皆彼れの價値論をこの意義に解してゐる。

(三) 彼れの學説は、尠くともその一部分は、資本と勞働とを同一視せること、及び利潤と勞働に對する報酬とを同一視せることに依存してゐる、――このことは後程彼れの祖述者によつて完成せられ、又後の社會主義者の理論に這入つたものである。[1](註)

(註) レヴィンスキーも亦この解釋をとる。

『リカアドが勞働費用に利潤率を加へたことは事實に相違ないが、しかし彼れの價値論が異なれる貨物に投ぜられたる勞働の分量以外の他の根據を持つてゐると推測するのは間違つてゐる。[2]』

しからばリカアドは、或る種の修正を認めたるに拘はらず、依然として勞働價値論を根柢に於て支持したものであつて、ロードベルタスやマルクスがリカアドの價値論を當に勞働價値論であるとすることは、彼を誤解せるもので

1) Ashley, "The Rehabilitation of Ricardo," The Economic Journal, Vol. I, 1891, p. 477.
2) Lewinski, Founders of Economics, pp. 111—2.

あるとのマーシャルの非難の却つて當らないことを推測し得らるゝが如き論據は何處に見出すべきであらうか？　私はこの點について左に若干の詮索をして見たいと思ふ。

先づ第一に、彼れの所謂修正が詳細に取扱はれてゐる『原理』第三版第一章第四、五節に於て、さきにも述べて置いたやうに、勞賃利潤の相對價値の變動に及ぼす影響は『より小さい變動であり[1]』、『この種の原因は、結果に於て、比較的輕微である[2]』から、『勞働の(價値の)下落又は騰貴によつて生ぜしめられたる結果を全然考慮外に置くのは、間違つてゐるであらうが、それに甚だ重きを置くのも等しく正しくないであらう。仍つて本書の以下の部分に於て、私は時としてこの變動の原因にも說き及ぶであらうが、貨物の相對價値に於て起る總ての大變動は、貨物を生產するに時々必要なる勞働の分量の多少によつて發生するものと看做すであらう[3]』と云つてゐるのを注意すべきである。

右に引用したる所に於て、リカアドが以下の部分に於ては、貨物の相對價値の變動は主としてそれを生產するに必要なる勞働の分量の多少に依ると看

1) Ricardo, ibid., p. 35.（同譯本67—8頁）
2) Ricardo, ibid., p. 29.（同譯本55—6頁）
3) Ricardo, ibid., p. 30.（同譯本57頁）

做すであらうとある通り、彼れのこの態度が彼れの經濟理論全體を一貫してゐることは既に本論第三篇に於て見たる如くである。實質上に於いて、彼れの地代論も、勞賃論も、利潤論も、みな彼れの勞働價値說に依存してゐるのである。

彼れの地代成立の基礎的命題に『すべての貨物……の交換價値は……かゝる利便を有せざる人々に依つて、即ち最も不利なる事情……の下で、それらのものを引き續き生產する人々に依つて、その生產に必然的に費されたる、より多くの勞働の分量によつて左右せらるゝ[1]』とあり、さうしてリカアドは『アダム・スミスが貨物の交換價値を、即ちそれによつて貨物が生產された所の勞働の相對的分量を、規制したその根本法則が、土地の占有および地代の支拂によつて少しでも變更され得る[2]』と考へたのは間違つてゐると云ふのであつて、彼れの地代論は當に彼れの勞働價値說に依據してゐるのであるが、彼れの地代論のうちにはなほ次のやうな詞も見出される。

『金屬の價値は、利潤の率や、勞働率や、鑛山に對する地代やによつて定まるの

1) Ricardo, ibid., p. 50.（同譯本99頁）
2) Ricardo, ibid., p. 55.（同譯本109頁）

ではなくて、金屬を取得し、そしてこれを市場に齎らすに必要なる勞働の全量によつて定まるのである。[1]』

更に第六章『利潤に就て』の始めに左の詞がある。

『吾々は、穀物の價格が、地代を支拂はない所の資本のその部分を以て、それを生産するに必要なる勞働の分量によつて左右さるゝことを研究して來た。吾々は又、總ての製造貨物の價格は、その生産により、多くの勞働か或はより少しの勞働かゞ必要になるに比例して、騰貴或は下落することをも研究して來た。[2]』（註）

（註）同樣なる意味の詞は他にもある。その一二を左に引用する。

『一貨物の眞實價格は、こゝではそれを生産するために使用されなければならない所の、勞働および資本（即ち蓄積されたる勞働）のより大なる或はより小なる分量に依存するものと正當に論述されてゐる。眞實價格は、或る人々が主張する如く、貨幣價値に依存しない。又他の人々が言ひしが如く、穀物とか、勞働とか、或は個々のものとしての或る貨物とか、若くは集合體としての總ての貨物とか、に對する相對價値にも、依存しない。實はマルサス氏が正當に言へる如く、「それを生産するた

1) Ricardo, ibid., p. 63.（同譯本124頁）
2) Ricardo, ibid., p. 87.（同譯本169頁）

めに使用されなければならない所の、勞働および資本のより大なる（或はより小なる）分量に依存する」のである。[1]』

『若しも穀物と勞働とが共に交換上の眞實價値の正確なる尺度でないとするならば、――而してこれらのものは實際さうではない――如何なる他の貨物がさうであるか？――確かに何物もさうなり得ない。然らば若しも貨物の眞實價格なる言ひ表はし方が何等かの意味を有つものとするならば、それはマルサス氏が地代に關する論文に於て論述したる所のものでなければならない。そは貨物を生産するに必要なる資本[2]と勞働との比例的分量によつて測定されなければならない。[3]』

『粗生生産物および製造品の價値を左右するところのその同じ一般法則が、金屬物にも亦適用される、と云ふことを注意すれば足るであらう。その價値は、利潤率や、勞賃率や、鑛山に對して拂はれる地代やによつて定まるのではなく、金屬を獲得して之を市場に齎らすに必要なる勞働の全量によつて定まるのである。[4]』

この彼れの態度は、彼れの書翰集に於ても亦容易に見出される。例へば一八一九年一二月一八日附マカロックに宛てたる書信の中に左の如き文句が發見される。

『私は以前にも增して價値の大なる規制者は、評價される貨物の生産に要し

1) Ricardo, ibid., p. 404.（同譯本392頁）
2) 蓄積されたる勞働のこと
3) Ricardo, ibid., p. 409.（同譯本403頁）
4) Ricardo, ibid., p. 63.（同譯本123—4頁）

たる勞働の分量であると云ふことを信じてゐる。勿論貨物が市場に齎らされたるに要する時間の不同なる狀態からして、この說に多くの修正が許されねばならないが。併しこのことはこの說それ自身を拒否するものではない。私は、價値規制の原則に就て爲した所の說明に滿足してゐるものではない。より、よく筆がたつてそれをなしたならばよからうにと思つてゐる。要するに總ゆる困難を說明すべき缺點は、その說の不適當にあるのでなくして、それを說明せんと試みる人の不適任にあるのである。[1]』

なほ吾々は左の如き章句をほかの書翰に見出す。

『度々貴下に御話しゝたやうに、私は、私の爲した價値の說明には滿足してゐない。何處で私の標準を決めるべきかを確と知つてゐないから。私は、貨物に實現してゐる所の勞働の分量の上に、その貨物の相對價値を支配する規則を決めると云ふことに於ては、私の行方は正しい、と十分に確信してゐる。がしかし私が絕對價値の標準を決定せんとする時には、私は一年間の勞働か、一月間のそれか、一週間のそれか、或は一日間のそれか、その何れを選んでよいか

1) Letters of Ricardo to McCulloch, p. 47—8.

を決めることができない。[1]』(註)

(註) リカアドが、利潤、勞賃に依つて惹起される價値の變動に重きを置かなかつたことを示す彼れの書簡は、さきに引用したる所の一八二二年五月一九日附マカロック宛のものゝ外、左の如きものがある。

一八二〇年一〇月一〇日附マルサス宛——『貴下は、貨物に投ぜられたる勞働の分量は、僅かの例外ある外、それらが相互に交換さるゝであらう所の比率を決定すると云ふ私の命題の根據は十分でない、と云はれる。それが嚴密に眞ではないことは私も認めるが、私が背て開いた限りに於ては、それは相對價値測定の規則として、殆んど眞理に近いと、私は云ひ度い。貴下は需要供給が價値を規定することを云はるゝが、私はこの書翰の始めに述べた理由により、それは何ごとをも意味しないと思ふ。價値を規制するものは供給であつて、供給は比較的生產費に依つて支配される。生產費は、貨幣に現はされたる場合には、勞働の價値および利潤を意味する。……これらの變動は如何なる原因(永久的原因を意味する)に歸することができるか。それは二つの原因に、さうして二つの原因にのみ歸することができる。その一つの原因は、勞賃の騰貴又は下落、若くは私がそれと同じことを意味すると思ふ所の利潤の下落又は騰貴であつて、その影響は大したものではない。今一つの原因は、貨物の生產に要せらるゝ勞働の分量の多少であつて、それは極めて重要なるものである。第一の原因からは、大した影響は惹起されない。と云ふのは利

1) Ricardo, ibid., p. 96.

潤は價格の一小部分を占むるに過ぎないのであつて、それが爲めに價値の大なる增減が惹起されることがないからである。ところが第二の原因に對しては際限を附することができない。と云ふのは貨物の生產に要せらるゝ勞働の分量は、二倍若くは三倍と變動することがあるからである。[1]』

一八二三年八月二一日附マカロック宛――『貨物(の價値)がかくの如く利潤の變化の爲に變動する時に、貨物の生產に必要なる勞働の分量以外に、他の變動の原因はないと確言するのは正しいであらうか？ それは正しくない。實際上貨物(の價値)が利潤の變動に依つて變動するのはホンの僅かではある。と云ふのは利潤は一般的に極めて少しゝか變動することがないから。しかし私はそれかと言つて、若し利潤が變化するならば、貨物(の價値)も亦變動すると云ふことを認めざらんとするものではない。[2]』

以上私は、リカアドの價値論は結局如何なるものとして殘つたのであるか、それは遂に一種の生產費說となり終つたのであるか、或はそれはその根柢に於て、依然として勞働價値論として終始したのであるか、その孰れであるかを、その各々の解釋を容るべきが如き論據を彼れ自身の言葉に見出すことによつて吟味し、さうして私は、彼れの修正あるに拘はらず、彼れの價値論は依然と

1) Letters of Ricardo to Malthus, p. 175—6.
2) Letters of Ricardo to McCulloch, p. 178.

して勞働價値論として殘り、その基礎に於てそれより離るゝことができなかつたのであると思ふと同時に、この二つの相矛盾せる態度を彼リカアドに於て見出すことを否認するわけに行かぬのである。しからばこの彼れの勞働價値論に對する曖昧なる態度は一體何を意味するであらうか？

リカアドが斯樣に彼れの勞働價値說の不十分なることを認めんとする態度と、それに執着せんとする態度との二つの態度をとつたのは、この態度を裏づける矛盾の現象――勞働價値と生產價格、剩餘價値と平均利潤との矛盾の現象――をよく見得たによるものであつて、それはリカアドの功績であるに拘はらず、彼はこの矛盾の現象を矛盾の現象として、卽ち資本家的生產方法の必然的現象として見、さうしてそれを彼れの價値論から說明することを爲さず、それを彼れの價値論の矛盾として遂にそれに一種の修正を加へるに至つたものである。卽ちリカアドは、この惡世界に於て現實に存在するところのこの矛盾の現象、二個の經濟的法則の二律背反の實際的解決をば、平均利潤率の法則のために勞働價値法則を、或る程度迄、犧牲にすることによつて成し遂

げようとしたのである。マルクスの詞に從へば『リカアドをして初めから喰ひ消なしめ得なかつた彼れの大なる罪は、彼が自分の價値說の正しいことを外見上それと相衝突する經濟的事實に對して證明しようと試みたことにある。』[1] かくして、リカアドに在りては、剩餘價値の利潤化、勞働價値の生產價格化はない。これらの概念は彼に於ては同じなのである。

リカアドは明に現今の資本家的社會に於ける貨物の交換價値をそれが生產に費されたる勞働の相對的分量により決定し、さうしてそれを以て總ゆる現實の諸經濟現象の本質を說明せんとするのであつて、それは彼れのスミスに優る點であるが、彼が最後迄その勞働價値法則を純粹なる形に於て支持し得なかつたのは、彼が資本家的社會に於ては、平均利潤率の法則の存在するがために、個々的貨物の價値は、多くの場合、その生產價格と一致することなくして、それは利潤、地代、勞賃の合成として現はるゝことにより、換言すれば、異なれる生產部門に於ける資本競爭に因る價値の生產價格化により、生產價格は價値より離れ、それは恰も一見勞働價値法則の支配を脫するが如く見ゆるがし

1) Marx, Der Briefwechsel zwischen F. Engels und K. Marx, 1844 bis 1883, IV, S. 406.

かし勞働價値法則が、たゞそれのみが、その現象形態の內的基本的要素として、總體的に、究極的に、價値、價格現象を制約支配することにより、資本家的生產方法の諸運動法則を規定するところの基本的實在的法則たり得るものであることを、明瞭に意識することができなかつたことに因る。リカアドに在りては、『價値の法則はたゞ內部的法則としてのみ、又個々當事者より見れば盲目的な自然律としてのみ作用し、生產の偶然的波動の眞中にその社會的均衡を維持するものである』[1]として十分に映らず、彼は現象形態、外的諸運動とその本體、內部的關係とを明白に識別し、さうして現象的なる諸運動をその內部的なる現實の運動に約元することを認識し、それを十分滿足に成し遂げることができなかつた。現象と本質との不一致、矛盾、それが本體からの理論的解明——そこに社會科學の唯一の任務がある！

之を要するに勞働價値說に出發し、それが本質的內容を克く把捉し、それを徹底的に主張する限り、勞働價値よりの貨幣、資本の概念の決定、勞働と勞働力

1) Marx, Das Kapital, III, 1, S. 417, (同譯本三の四448—9頁)

との分別、不變資本と可變資本との區別、剩餘價値の成立、剩餘價値の利潤、利子、地代への轉化、剩餘價値率の平均利潤率への轉形、及び價値の生産價格化などの問題に到達すべきである。リカアドは勞働價値說に出發し、勞賃と費消勞働とを識別し、資本を蓄積勞働に還元し、勞賃と利潤との相反を主張し、地代成立をその勞働價値說に懸らしめてゐるのみならず、それが內容的結構は、實質上、大體に於て、右の諸問題解明の鍵を保藏してゐるのである。卽ちリカアドに在りては、近世ブルジョア階級の政治的法律的哲學的思想全體が依つて以て建設せらるゝところの實體的基礎たる勞働に依る商品價値の決定並びにこの價値尺度に從つて行はるゝところの平等なる商品所有者間に於ける勞働生産物の自由交換は、すでに大體に於て、よく把捉せられてゐるのである。マルクスに依れば、『リカアドの價値論は現代經濟生活の科學的說明である。……リカアドは彼がそれを總ての經濟事象から誘導し、さうしてこの方法により、總ての現象を、地代、資本の蓄積、並びに勞賃の利潤に對する關係の如き、一寸見たところでは、眞理に矛盾するが如く見ゆるその現象をすら、說明することによつて、彼れの公式の眞理を確說してゐるのであつて、當にこのことは彼れの理論をして一の科學的體系たらしむるものである。[1]』にも拘はらず彼がその勞働價値說を右の諸問題に迄發展せしめ得ず、資本主義的生産方法の內面的連關、機構を充分瞭にし得なかつたのは、諸々の理由にも由るであらうが、特に彼が現實の經濟事象を、隨つて又經濟關係を、自然的固定的なるものと觀じ、それを歷史的進化的なるものとして發展過程に於て見なかつたがため、現象形態とその本體、卽ちその內面的連關との外見的矛盾の現象をば、資本家的生産方法に本質的なる矛盾の現象として見ず、それを非進化的靜止的なる法則により非辯證法的に說明しようとしたことに由るのである。リカアドの意識に於ては、事物の生成發展、隨つて又勞働價値法則の、內面的生産關係の、生滅轉變は初めからこれなかりしものである。(註)

リカアド經濟學は、右述べたるが如く、科學の歷史に於て極めて重要なる地位を刻印せるに拘はらず、なほ未だ至らなかつた諸々の諸點を有してゐたがため、遂にそれはリカアド學派の解消に導くに至つたものである。リカアド

1) Marx, Das Elend der Philosophie, 1921, S. 22.

經濟學の、更には一般的に、古典派經濟學の正純なる發展成形は、なほ諸々の學派の消長、經濟事實、のより一段の發展、隨つて可なりの年月、を必要としたものである。しからばリカアド學派の解消より、諸々の學派の興隆生滅を經て、それが正統なる發展に達したところのその過程は如何なるものであつたであらうか？　地代は土地より、利潤は資本より、勞賃は勞働よりと云つた風に、經濟の現象形態をば、その本體との內面的連繫から全く切り離して、たゞそれのみを見ようとする所の、隨つて彼等には現象と本體との矛盾の問題がない所の、マカロック以下の所謂俗流經濟學者の一連、リカアドの勞働價値說を無批判的に受け入れ、道德的正義の主觀的感情から、現實の社會に於て、それを平等主義的に應用せんとする所の、リカアデアン・ソシアリスト（ブレイ、ダムスン、ホヂスキン、エドモンヅ、グレイ等々）ブルードン、ロードベルタス等の小市民的空想的社會主義者の面々を經て、マルクスに至る發展過程は卽ちこれである。

（註）リカアドのこの矛盾の現象に對する態度について、ヴヰザアは『リカアドはアダム・スミスの哲學的理論と經濟的理論とは、一見見ゆるが如く、決して相矛盾するものではない、ことを示すに全力を注いだ』[1]のであるが、彼はそれを爲し遂げることが出來なかつたとか、それゆゑにローゼンベルグはリカアドの價値論は『經驗的實在に對する讓步が哲學的出發點卽ち勞働價値法則と理論的に結合せられないといふ、致命的にして醫すべからざる缺點を有つた』[2]盡殘ることゝなつたなどゝ云ふ。だがこれらの批評はこの點に對するリカアド價値論の立場を說いて十分とは云へない。

1) Wieser, Der natürliche Werth, 1889, Vorwort, V.
2) Rosemberg, a. a. O., S. 30.

附　　録

「リカアド價値論の研究」參考引用書目

「リカアド價値論の研究」に於て直接參考し又は引用したるところの書物のうち、たゞホンの一寸觸れるにとゞまつたもの、又は直接彼れの價値論に關係なきものはなる丈けこれを省き、主なるものを下に掲げて置く。何らかの便宜とならば幸である。

1) Ricardo, D., On the Principles of Political Economy and Taxation, 1st ed., 1817, 2nd ed., 1819, 3rd ed., 1821.

リカアド價値論についての見解はすでに The High Price of Bullion, 1811, An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock, 1815, に於て散見するのであるが、しかしそれが纏りたる態樣に於て詳しく展開主張せられたのが Principles に於てゞあることは申す迄もない。Works, ed. by McCulloch に於ける Principles 及ゴナアのそれが版本はともに第三版をテキストとせるものであることは人のよく知るところである。本文中の引用は主としてこの第三版（堀經夫氏の邦譯がある）からである。

2) Letters of David Ricardo to T. R. Malthus, 1810—1823, ed. by Bonar, 1887.

3) Letters of David Ricardo to J. R. McCulloch, 1816—1823, ed. by Hollander, 1895.

4) Letter of David Ricardo to H. Trower and Others, 1811—1823, ed. by Bonar and Hollander, 1899.

リカアドの價値論の發展變遷の過程はこれらの書簡集の發表により一層瞭にせらるゝに至つた。

---

1) Amon, A., Ricardo als Begründer der theoretischen Nationalökonomie, Eine Einführung in sein Hauptwerk und zugleich in die Grundprobleme der nationalökonomischen Theorie, 1923.

リカアドの百年祭 (11. September 1923) の記念として公刊せられたるもの。Nicht, Ricardo zu ersetzen, wie ein neuerer Systembildner geglaubt hat, ist die Aufgabe der Zeit auf unserem Wissensgebiet, sondern, seine Gedanken zu *verstehen* und *fortbilden* との見地からリカアドを理論經濟學の創始者となし、その價値說を稀少說を以て補正することにより、リカアド經濟學を發展せんとするものである。

2) Ashley, W. J., "The Rehabilitation of Ricardo," The Economic Journal, Vol. I, pp. 474—89.

マーシヤルなどがリカアドの價値論を勞働價値論であると解するは間違つてゐるとするに對し、

その然らざることを云ひ、それは根柢に於てあく迄も勞働價値說であると主張する一論文。

3) Böhm-Bawerk, E. v., Kapital und Kapitalzins, Geschichte und Kritik der Kapitalzinstheorien, 4te Aufl., 1920, (1884).

限界效用說の立場からリカアドの價値論を隨所に於て解釋批評してゐる。なほ彼にはリカアドの價値論が客觀的勞働價値說であるか否かの解釋についてディチェルに對して爲されたる論爭文に下の如きものがある。

4) 〃 ,"Ein Zwischenwort zur Werttheorie," Conrads Jahrbücher, Bd. XXI, N. F., S. 519ff.

5) 〃 ,"Wert, Kosten und Grenznutzen," Conrads Jahrbücher, Bd. III, 3F. S. 321 ff.

この論文は最近出た彼れの Gesammelte Schriften, 1924, に收錄されてゐる。

6) 〃 ,"Zur theoretischen Nationalökonomie der letzten Jahre," Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung, Bd. VII, S. 428ff.

この論文の一部分 "Kostenwert und Nutzwert," が同樣にディチェルのリカアド解釋の反駁文であつて、彼れの上記論文集に收錄せられてゐる。

7) Bailey, S, A Critical Dissertation on the Nature, Measure, and Causes of Value;

chiefly in reference to the Writings of Mr. Ricardo and his followers, 1825.

リカアドおよびその學徒の價値論の矛盾曖昧を突けるものとして當時かなり有名になつた書物である。著者の立場その缺點は兎も角としてリカアドの價値論の不十分を一面的にてゞはあるが論理的にかなりよく指摘してゐる。當時のリカアド價値論批評の尤なるものであらう。

8) Cannan, E., A History of the Theories of Production and Distribution in English Political Economy from 1776 to 1848, 3rd ed., 1917, (1893).

なほリカアドの價値論には直接關係はないがこの著者には "Ricardo in Parliament," The Economic Journal, Vol. II, pp. 247—61, なる論文がある。

9) Cassel, G., Theoretische Sozialökonomie, 3te Aufl., 1923, (1818).

10) 〃 ,"Die Productionskostentheorie Ricardo and die ersten Aufgaben der theoretischen Volkswirtschaftslehre," Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft, 1901, S. 68 ff.

リカアドは實際の生產に參加せる諸々の要素をば唯一の要素に還元し、以て商品の價格構成をその生產費から說明せんとしたとの解釋の下に、リカアド價値論を發展せしめることにより、彼れ獨特の價格理論を樹てんとするものであつて、同じくリカアドの發展ではあり乍ら社會主義經濟學のリカアド價値論の發展と全然に於て異なれる立場に在る。著者は一種の新らしい Ricardianer であると云へる。

11) Cornélissen, C., Theorie de la valeur, 1913.

主觀學派の立場から批評してゐる。

12) Cossa, L., Introduction to the Study of Political Economy, 1893, pp. 311—21.

13) Davenport, H. J., Value and Distribution, A Critical and Constructive Study, 1908, pp. 29—43.

14) Denis, H., Histoire des Système économiques et socialistes, 1907, Vol. II, p. 147 et suiv.

一の學史としてはリカアドを取扱ふこと最も詳しいものゝ一つであらう。

15) De Quincey, T., "Malthus on the Measure of Value," The London Magazine, 1823, December. Works, ed. by Masson, pp. 32—6.

16) 〃 , "Dialogues of Three Templars on Political Economy, The London Magazine, 1824, March, April, and May. Works, ed. by himself, Vol. IV, pp. 176—257. Works, ed. by Masson, Vol. IX, pp. 37—112.

17) 〃 , The Logic of Political Economy, 1844. Works, ed. by Masson, pp. 118—294.

これらは文藝批評家にして同時に Ricardianer であつた著者がその立場からリカアドの經濟學、價値論を辯護又は主張したる論文著書である。二つの論文はともに『經濟學上の科學的活氣を以て特徴とし、幾多のスパラシイ試合が行はれた』時代の產物に屬する。

18) Diehl, K., Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu David Ricardos Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung, 3te Aufl., 1921, (1905).

リカアドが問題解決に當り陷つたところの諸々の誤謬をば指示するを目的とせず、寧ろ誤つてゐると考へられる彼れの理論の方法論的出發點をば瞭にするを目的とするとの見解の下にリカアドの價値論を取扱つたものである。著者のリカアド研究は全二冊より成り價値論を特に取扱つてゐるのはその第一冊 S. 1—155 である。所謂社會的法的學派の立場からリカアドの價値論を自然的個人的抽象的觀察の下に在るものと解し、諸々の豐富なる材料を以て解釋論評してゐる。獨逸に於ける現存のリカアド學者であるだけにリカアド價値論をかなり詳しくよく論評してゐるが、しかし半面に於て original にして suggestive な觀點が缺けてゐると評してもよいやうに思ふ。なほディールには次の論文がある。

19) 〃 , "David Ricardo," Handwörterbuch der Staatswissenschaften, 2te Aufl., VI, S. 426—437, 3te Aufl., VII, S. 122—131.

20) Dietzel, H., Theoretische Socialökonomik, 1895, S. 226 ff.

ディチェル獨特のリカアド價値論解釋はこの書に詳かに述べられてゐる。リカアド價値論は限界效用說と必らずしも相衝突するものでないことを主張するのである。なほディチェルにはリカアド價値論の解釋に關して次の如き諸論文がある。ベエム•バワアクとの間にその解釋について論爭のあつたものである。

21) 〃 , "Die klassische Werttheorie und die Theorie vom Grenznutzen," Conrads Jahrbücher, Bd. XX, N. F., 1890, S. 561 ff.

22) 〃 , "Zur klassischen Wert und Preistheorie," Conrads Jahrbücher, Bd. I, 3 F., 1891, S. 685 ff.

23) Gide, C., et Rist, C., Histore des doctrinés économiques depuis les physiocrates jusquá nos jours, p. 160 et suiv.

著者はリカアドに於ける價値論の彼れの一般的理論（分配論）に對する重要を認めず、前者は寧ろ後者に附隨たるべきものであるとする。だから彼れの價値論を詳しく論ずるところがない。

24) Gruntzel, J., Wert und Preis, 1814, S. 52—8.

25) Gonner, E. C. K., Introductory Essay to his edition of Ricardo's Principles of Political Economy and Taxation, XXIII—LXIII.

英國に於けるリカアド研究の權威たる著者がリカアドの『原理』の自分の版本に附錄として附加

せるものであつて、かなり詳しくリカアド學說の大綱を紹介批評せるものである。價値論についても觸れてゐるのは申す迄もない。ゴナアにはなほ次の論文がある。

26) 〃 , "David Ricardo," Palgrave's Dictionary of Political Economy, 1918, Vol. III, pp. 304—9. (但しこの論文のうちリカアドの傳記及び著作については Rogers の述ぶるところ)。

27) Haney, L. H., History of Economic Thought, 1920, pp. 252—78.

28) Hanisch, G., Die klassischen Werttheorien, 1913.

主としてスミスとリカアドとの價値論を極めて簡單に說いたもの。

29) Held, A., Zwei Bücher zur Socialen Geschichte Englands, 1881, S. 176—204.

ヘルトのリカアド批評は獨特のものでかなり有名なるものである。彼れによればリカアドは資本家の利益を代表し抽象的にして論理的なる方法を用ひて利潤の正當を辯護したものであるといふ。

30) Halvéy, E., Le Radicalisme philosophique, 1904, p. 5—54.

31) Hollander, J. H., "The Development of Ricardo's Theory of Value," The Quarterly Journal of Economics, August, 1904, pp. 455—91.

リカアド價値論に對する贊否は今猶ほ旺んであるが、それらは概ねリカアド價値論の本來的の說明並びにそが引き續き如何に變遷して行つたかを顧みることを怠つてゐる　ところが最近(前世紀末)出たところのリカアドの書簡集はこの點に就て極めて貴重なる材料を供するものであつて、彼れの價値論に於ける mental history をよく窺はしむるに足るものである。斯樣なる見地から現今に於けるアメリカのリカアド學者たる著者がリカアドの價値論の本源およびその發展の跡を趁はんとせるものである。リカアドの mental history を三期に分ち、その時代の背景を顧みつゝ、實際上の問題と純理との關係、勞働價値說と生產費說との關係についてのリカアドの思想の變遷發展——漸次實際問題に關聯することから離れて純理の問題卽ち價値尺度の問題に進みたること、勞働價値說と生產費說とを妥協せしむるに至つたこと——をよく說いてゐる。在來の多くのリカアド價値論解釋批評の指針となつたと云つても差支あるまい。

32) 〃 , David Ricardo, 1910.

著者がリカアドが最初の著作 "The High Price of Bullion," 1811, の centenary estimate として出したものである。リカアドの生涯著作影響を傳へたるもので最も詳細且つ確實なるものであらう。特に時代の背景を顧みつゝ彼れの mental history を取扱つたことは上記論文と同樣注目に値する。價値論の紹介論評は特に著作の部に見出される。

33) 堀經夫 『價値論上のリカアドとマルクス』經濟論叢第十一卷第四、五、六號

34) Ingram, J. K., A History of Political Economy, new and enlarged ed., 1915, pp. 120—34.

リカアドの研究方法は餘りに deductive であり、その理論は餘りに abstractive であるとの觀

點から批評したるもの、歴史派經濟學のリカアド批評の一好例である。かゝる批評態度は歴史派經濟學の勃興以後今日に至る迄多くの學者のとるところである。

35) Jevons, H. S., The Theory of Political Economy, 4th ed., 1911, (1871).

價値は效用に本づくとの主觀的立場を、リカアド流の客觀的勞働價値說に反對の形、色彩を多分に持ちつゝ、主張したるものであつて、リカアドは經濟學の車輪を間違つたる軌道に轉ぜしめたとの觀點からリカアドを隨所に於て非難してゐる。

36) 加田哲二 經濟價値論 108—124 頁

37) Kalinoff, D., David Ricardo und die Grenzwerttheorie, Eine Beitrag zum Streit zwischen Nutzen und Kostenwerttheorie, 1906.

38) Kaulla, R., Die geschichtliche Entwicklung der modernen Werttheorien, 1906, S. 147—158.

39) 河上 肇 資本主義經濟學の史的發展 298—322 頁

40) 小泉信三 『リカルドオの價値論』三田學會雜誌第十六卷(前半)二、三、四、五、六號

41) 〃 『續リカルドオの價値學說論』三田學會雜誌第十六卷(後半)八、九號

リカアドの價値論の本質およびその發展經過を詳しく說明せるもの、我國に於ける最も詳密なるリカアド價値論研究であらう。その結論は大體マーシヤル、ホランダア、ディチェル等のそれと相似たるものゝやうである。

42) Lewinski, J. St., The Founders of Political Economy, 1922, pp. 106—169.

リカアドを經濟學の三大建設者の一人、その最後の一人と觀じ、全卷の約三分の一以上をリカアド理論の紹介批評に充てゝゐる。著者は『吾人はリカアドに經濟學の最も尊い寶石——價値論及び地代論を負ふ』『リカアドの「原理」の背景の下に於ては、これらの分配論は悉く極めて貧弱なる感銘を與へるに過ぎない』と云ひ、リカアド以後經濟學の進步は微々たるものであるとなし、大體に於てリカアド經濟學の立場を是認してゐる。

43) Liebknecht, W., Zur Geschichte der Werttheorie in England, 1902, S. 28—29, 90—92.

リカアドの價値論の生長發展はマルクスのそれであるとする立場からこの二者の異同を辯じつつ、リカアド價値論を簡單ながら論評してゐる。

44) 舞出長五郎 『リカアド分配論概說』經濟學論集第三卷第三號

リカアド經濟學の不十分は、彼れの非歴史的非進化的見地から價値、分配現象を自然科學的技術的に考察したことに歸するとして、彼れの價値論分配論を概觀せる一論文。

45) McCulloch, J. R., "On Ricardo's Principles of Political Economy and Taxation," The Edinburgh Review, 1818, June, pp. 59—87.

46) 〃 , "The Principles of Political Economy, etc., 1830.

リカアドの絶對的信奉者であつたマカロックにはリカアドに關した述作は頗る多い。こゝに二書を擧げるにとゞめる。彼はリカアドに對する非難のある毎に自ら起つて彼れを辯護したものである。しかしマカロックはリカアドを皮相的にしか解し得なかつたがために、その學說例へば價値論利潤論などは實質上リカアドから甚だしく離れてゐる。リカアド經濟學の解消通俗化に先鞭をつけたものである。なほ Letters of Ricardo to McCulloch はこの二者の學問的關係を詳しく傳へてゐる。當時リカアド經濟學を中心として價値決定尺度その他についての問題に參加したる所の學者はこゝに擧げたるものゝ外例へば Torrens, Mill, Say その他などがある。だがそれらの學者のリカアドの價値論に關聯せる著作論文を一々擧げれば切りがないのみならず、又私の一々について勉强したと云ふわけではないから、それらはすべてこゝに揭げない。

47) Malthus, T. R., Principles of Political Economy considered with a view to their Practical Application, 1820.

48) 〃 , The Measure of Value stated and illustrated, with an Application of it to the Alternations in the Value of the English Currency since 1790, 1823.

49) 〃 , Definitions in Political Economy, etc., 1827.

價値決定、尺度標準その他の問題について常にリカアドと反對の立場に立ちつゝ終生論議したるところのマルサスのリカアド批評が彼れの論著の至る所に現はれてゐることは云ふ迄もない。なほ旣揭 Letters of Ricardo to Malthus に於てもこの二者の價値論に對する異なれる態度がよく窺はれ得る。

50) Marshall, A., Principles of Political Economy, 8th ed., 1920 (1890), p. 503, and Appendix 1, "Ricardo's Theory of Value," pp. 813—21.

著者はその折衷的立場からリカアドの價値論に限界效用說を容れ得べき素地あることを說き、ジェヴンスのリカアド批評(リカアド價値論を純然たる客觀的價値論と解釋しそれを非難する)の餘りに苛酷にして當らざることを主張し、隨つて又リカアドとロードベルタス、マルクスとを結び附けんとする試みを排擊する。この解釋に對しては旣揭 Ashley の反駁文がある。

51) Marx, K., La misère de la philosophie, Das Elend der Philosophie.

52) 〃 , Zur Kritik der politischen Ökonomie.

53) 〃 , Das Kapital, 3 Bde.

54) 〃 , Theorien über der Mehrwert, 3 Bde., bes. Bd. II, 1, 2.

55) 〃 , "Der wissenschaftliche Character von Malthus und Ricardo," Die Neue Zeit 1905.

マルクスの經濟學が古典派經濟學の、リカアド經濟學の、辯證法的發展であるとする限り、リカア

ド價値論經濟學の決定的なる解釋理論がマルクスの諸著作のうちに見出されるであらうことは容易に考へられる。就中 Theorien 第二卷二冊は殆んど全部をリカアド學說の解剖批評に充てられてゐる。マルクスの著作はよく知られてゐるからそれについての詳しいことはこゝに述べぬ。なほマルクスにはこれ以外リカアドに觸れたる論文述作書簡がある。

56) 村松恒一郎 『理論經濟學の創始者としてのリカルド』東京商科大學創立五十周年 記念論文集

アモンが理論經濟學の創始者としてリカアドを見る論據を紹介しつゝ、アモンとリカアド、延いては輓近理論經濟學的思考とリカアドのそれとの間に存する思考形式の相違を明にすることによつて、理論經濟學の創始者を以てリカアドを目するアモンの評價をそれが妥當し得る適當の程度に迄修正しようとせる論文。

57) North, C. C., The Sociological Implications of Ricardo's Economics.

Small (Adam Smith and Modern Sociology, 1907) に從ひ、經濟的結論は社會的事實として人類經驗のより複雜なるものと相關聯せらるゝにあらざれば何等意義なし、卽ち單に經濟的事實は眞に經濟的ではない、との見地からリカアドの學說 (價値論) を論評せる小冊子。

58) Patten, S. N., "Malthus and Ricardo," The Publication of the American Economic Association, Vol. IV, Sept., 1889, pp. 9—34. Essays in Economic Theory, 1924, pp. 19—32.

59) 〃 , "The Interpretation of Ricardo," The Quarterly Journal of Economics, Vol. VII, pp. 322—353, April, 1893. Essays, pp. 144—163.

上記二つの論文はアメリカに於けるリカアド學者の一人であつた著者が彼獨特の見方からマルサスと對比しつゝリカアドを論評したるものである。マルサス、リカアド各々の社會、經濟理論の差異を彼等各々の住める社會的環境——一は田舍、農業、他は都會、商工業 —に歸し、前者は地主、農業の利害を、後者は工業資本家、工業の利害を、社會全體の利害なりと看做したものであると云ふ見地からリカアドを實證的に批判せんとするものである。一般的に original にして suggestive なリカアド解釋であると云つてよいであらう。なほ著者の下記の書にも同じ見地からリカアド經濟學が取扱はれてゐる。

60) 〃 , The Development of English Thought, 1899, pp. 303—311.

61) Price L. L., A Short History of Political Economy in England from Adam Smith to Arnold Toynbee, 1920, 10th ed. (1891), pp. 61—86.

主としてリカアドの地代論を取扱ひ價値論に觸れるところは尠い。マルクスの價値論はリカアドの價値論の logical outcome でないとして一種奇妙な無理解な說明をしてゐる。

62) Rosemberg, J., Ricardo und Marx als Werttheoretiker, Eine kritische Studie.

リカアドおよびマルクスの價値論を最も成形せる、最も論理的にして科學的なる、二つの勞働價

値論であるとなし、この二者の間に如何なる共通點と差異點とが在存するかを見定めんとせるものである。その批評の立場はリカアドの價値論を勞働價値論としてそこに長所と缺點とを認め、その缺點を是正しそれを擴充發展せしめたのがマルクスであるとする立場である。一二八頁の小冊子のうちにリカアドとマルクスとを並び紹介批評したのであるからさまで詳しいものではないが、多くのリカアド價値論批評解釋のうちにて先づ上々の部類に屬すると云へよう。

63) Rost, B., Die Wert-und Preistheorie mit Berüchsichtigung ihrer dogmengeschichtlichen Entwickelung, 1908, S. 38—41.

64) Stolzman, R., Die soziale Kategorie in der Volkswirtschaftslehre, 1896, bes. S. 52—70.

純經濟的範疇を排し國民經濟學に於ける社會的觀察方法、社會的範疇の必然を信ずる立場から、卽ち社會的有機的方法の立場から、リカアドの價値論を批評してゐる。

65) Turgeon, C. H., La valeur d'après les économiques anglais et français, 2re ed., 1920 (1913), p. 69—137.

リカアドの價値論を分析解剖すること可なり詳密である。

66) Whitaker, A. C., History and Criticism of the Labour Theory of Value in English Political Economy, 1904, pp. 41—60.

著者はヴ*ザアに從ひ正統派價値論には哲學的說明と經驗的說明との二つの見解が見出されるとする批評態度からリカアドの價値論を批評する。著者によればリカアドはこの二つの見解は一見相衝突するが如く見ゆるけれども、その然らざることを瞭にせんとするにあつたが、結局彼れの價値論はこの不十分なる調和に終つたものである。

67) Wieser, F. v., Der natürliche Werth, 1889, bes. Vorwort.

正純學派價値論には一般的に哲學的理論と經驗的理論とが並び見出されるとなし、リカアドの努力は dass die philosophische und die empirische Theorie des Smith, die beide er in dieser Absicht freichlich reinigen und weiterführen musste, einander nicht so sehr widersprächen, als der nächte Anschein zeigte. を瞭にせんとするにあるとの見解からリカアドの價値論を取扱ふものである。この見解には多くの追蹤者がある。

68) 山田盛太郎 『價値論に於ける矛盾と立場』經濟學論集第四卷第三號

リカアドは社會的生產の總行程を統一的全局的に分析するに至らず、又社會的歷史的見解の下にそれを把捉しなかつたがゆゑに、勞働價値法則と平均利潤率の法則との矛盾の現象は彼に在りては矛盾として反映したが、マルクスに至つて該矛盾は止揚せられたとの立場からこの點についてのリカアドの態度を批評せる論文。

69) 山口茂 『スミスとリカードの價値論に就て』商學研究第三卷第三號

交換によつて決定する交換價値を基礎づけるため交換さるゝものゝ核中に交換を可能ならしむる

何等かの力を見出さんとする努力の結果は、オーストリア學派にありては效用となつて現はれ、正統學派にありては勞働乃至生產費となつて現はれる。この交換價値を基礎づけんとする勞働乃至生產費は費用價値なる意味を有して完全にオーストリア學派に對立し價値の決定的發生原因たり得るか否かをスミスおよびリカアドに於て見定めんとせる論文。

70) Zuckerkandl, R., Zur Theorie des Preises mit besonderer Berücksichtigung der geschichtlichen Entwicklung der Lehre, 1889, bes. S. 253—262.

主觀學派の立場から見たるもの。リカアドの修正に餘り重きを置かず、隨つてその紹介論評を缺いてゐる。

大正十五年二月一日印刷
大正十五年二月五日第一刷發行

リカアド價値論研究
定價參圓五拾錢

著者 京都市淨土寺真如町字三島町 森耕二郎
發行者 東京市神田區南神保町十六番地 岩波茂雄
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 鷲見九市

所有權

發行所 東京市神田區南神保町十六番地 岩波書店 振替貯金口座東京七五三一八 電話番號 三六七〇番

合資會社合式會社

穂積陳重著法律進化論第一册 送料廿七錢 三圓八十錢
穂積陳重著法律進化論第二册 送料廿七錢 四圓五十錢
鳩山秀夫著增訂改版日本債權法總論 送料廿七錢 三圓二十錢
鳩山秀夫著增訂日本債權法各論上卷 送料廿七錢 二圓六十錢
鳩山秀夫著增訂日本債權法各論下卷 送料廿七錢 三圓
鳩山秀夫著日本民法總論上卷 送料十八錢 一圓七十錢
鳩山秀夫著日本民法總論下卷 送料廿四錢 二圓七十錢
鳩山秀夫著日本民法總論（第一篇總則） 送料廿七錢 三圓
鳩山秀夫著民法研究 送料十八錢 一圓六十錢
穂積重遠著法理學大綱 送料廿七錢 一圓
穂積重遠著親族法大意 送料十八錢 一圓四十錢
高柳賢三著新法學の基調 送料廿七錢 二圓八十錢
三浦周行著法制史の研究 送料廿六錢 七圓五十錢
三浦周行著續法制史の研究 送料廿六錢 九圓五拾錢
渡邊鐵藏著英國の勞働組合運動 送料十八錢 一圓五十錢
植野勳述倫敦金融市場の話 送料十八錢 一圓
岡部菅司 内山直 譯ケインズ 貨幣改革問題 送料十八錢 一圓八十錢
河田嗣郎著農業勞働と小作制 送料十八錢 二圓
那須皓著農村問題と社會理想 送料廿四錢 二圓二十錢
那須皓著經濟政策學原理 送料廿七錢 二圓五十錢
那須皓著公正なる小作料 送料六錢 三十五錢
氣賀勘重著農村問題 送料六錢 六十錢
山田勝次郎 東畑精一 譯ヴィゴドゼンスキー 農業政策 送料廿七錢 二圓八十錢

岩波書店刊行書目

高田保馬著社會學原理 送料廿六錢 七圓五十錢
高田保馬著現代社會の諸研究 送料十八錢 二圓二十錢
高田保馬著社會と國家 送料十八錢 二圓
高田保馬著改訂社會學概論 送料廿七錢 三圓二十錢
高田保馬著經濟學研究 送料廿六錢 四圓五十錢
小泉信三著改訂社會問題研究 送料廿七錢 三圓五十錢
風早八十二譯タルド社會學原理 送料十八錢 一圓六十錢
プレハノフ著マルクス主義の根本問題 送料十八錢 一圓五十錢
恒藤恭譯ボーレー著資本主義と社會主義 送料十八錢 一圓八十錢
堀經夫譯新カント學派の社會主義觀 送料十八錢 一圓六十錢
河合榮治郎著社會思想史研究 送料廿七錢 三圓
大山千代雄譯カアバア分配論 送料十八錢 一圓八十錢
左右田喜一郎著經濟學本質一般法則の論理的性質 送料十八錢 二圓三十錢
堀江歸一著改訂世界の經濟は動くか 送料廿四錢 二圓五十錢
堀江歸一著編譯世界の經濟は如何に動くか 送料十八錢 一圓八十錢
堀江歸一著英國現代の經濟 送料廿七錢 四圓二十錢
慶應義塾大學經濟學部編經濟學說研究 送料十八錢 二圓二十錢
山口正太郎著經濟學說史研究 送料廿七錢 二圓五十錢
黑正巖著經濟史論考 送料十八錢 二錢
堀經夫譯リカアド經濟原論 送料十八錢 二圓五十錢
田邊忠男譯レキシス經濟原論 送料廿七錢 二圓八十錢
林要譯クラーク分配論 送料廿七錢 三圓五十錢
大山千代雄譯カアバア分配論 送料十八錢 一圓八十錢

岩波書店刊行書目

土方成美著財政學の基礎概念　三圓二十錢　送料廿七錢

土方成美著經費論講義　壹圓五十錢　送料拾八錢

井上準之助著戰後に於ける我國の經濟及金融　貳圓　送料廿四錢

永井亨著婦人問題研究　參圓貳拾錢　送料廿七錢

慶應義塾學編現代思潮講演集　壹圓五拾錢　送料廿七錢

加田哲二著ウキリアム・モリス　三圓　送料廿七錢

フロイド・メース著松岡靜雄譯補瓜哇史　參圓五拾錢　送料廿七錢

占部百太郎著英國會の起原並に進展　一圓二十錢　送料十八錢

ブランシャード著英國ロ神大郎譯英國勞働運動概觀　二圓　送料十八錢

トインビー著十八世紀芝野十郎譯英國產業革命史論　三圓二十錢　送料廿七錢

東郷實著植民政策と民族心理　二圓　送料十八錢

竹內潔著石原純補遺原子の構造　一圓六十錢　送料十八錢

玉蟲文一・村瀨孝雄・水島三一郎譯ベラン原子　三圓　送料廿七錢

庄司彥六著力學（增訂版）　二圓八十錢　送料十八錢

佐野榮治著新力學　三圓　送料廿七錢

阿部余四男著生命論（改訂版）　二圓二十錢　送料十八錢

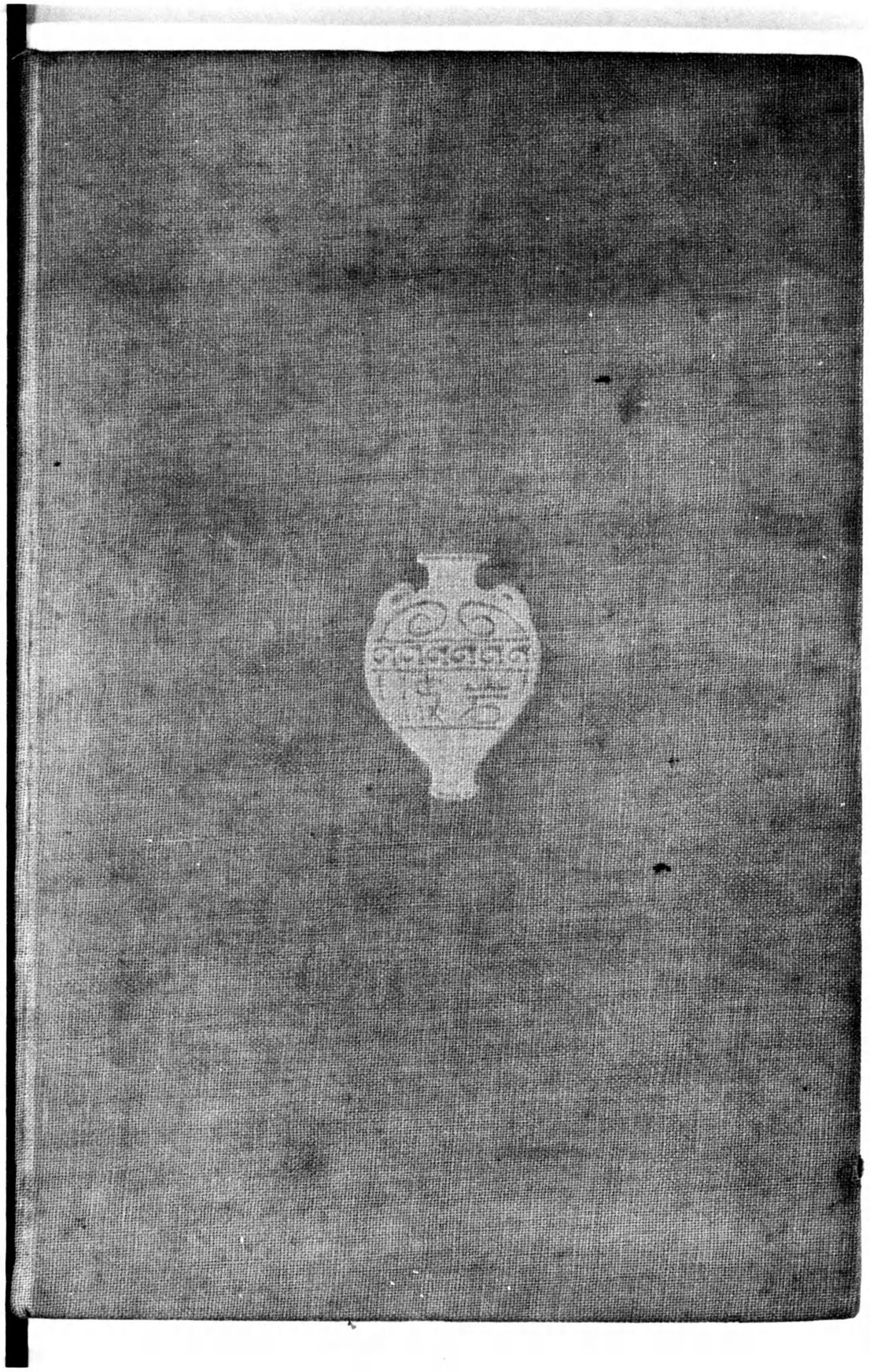
阿部余四男・神田正悌著兩性論　一圓八十錢　送料十八錢

阿部余四男著動物學講義　五圓　送料廿七錢

中澤毅一著動物と比較したる人間　一圓四十錢　送料十八錢

藤卷良知著榮養學全書ビタミン　二圓八十錢　送料廿七錢

日下部四郎太著物理黃道吉日　一圓　送料十六錢

新城新藏著天文大觀　一圓六十錢　送料十八錢

終